

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

半人半魔のデビルハンター

【作者名】

ピーターソン

【あらすじ】

伝説のデビルハンター、ダンテ。彼はついにその生涯に幕を下ろした。筈だったのだが……。

ふと目覚めればそこは悪魔、天使、墮天使等々あらゆる人外が入り乱れる異世界だった。

しかしダンテは異世界だろうといざ知らず、今日も今日とて刺激を求めて歩き出す。

Are you ready? (準備はいいか?)

Come on babes! Let's rock!

(ちあ、派手に行くぜー)

この二次創作はハイスクールD×Dとデビルメイクライ(というよりダンテ)のクロスオーバー作品。処女作です。設定に破綻など見られるかもしれませんが、その際は感想でご指摘頂ければ嬉しいです。

窮地の巫女

かつて人間界を悪魔の侵攻から救った魔剣士スパイダ。彼と人間の女性との間に生まれた半人半魔のデビルハンター、ダンテ。彼は今、薄れていく意識の中で、つらつらと過去に思いを巡らせていた。

ダンテの生涯はこれ以上無いほど波乱に満ちたものだった。

母を悪魔に殺され、兄とは袂を分かち、父の尻拭いをさせられ、手痛い裏切りを受けた。しかしそれらがあっても尚、ダンテは前に進み続けた。彼をそうさせたのは生来の豪放磊落な気性だけが理由ではない。比類なき強さで人間を救った父。そんな父も参ってしまう程に気高く美しい母。二人から受け継いだ血と魂が自分の体に宿っている。その事実がいつも彼の背中を押してくれたから。

何よりも誇りに思う血と魂。それらの命ずるままにダンテは剣を振るってきた。そこに後悔など一つも無い。

スパイダの血族として、その誇りを受け継いだ者として、なすべきことはすべて成した。ただひとつ未練があるとしたら又甥の顔を押んでおきたかった、それくらいだろう。

取り留めもない事を考えていると、いよいよダンテの意識は遠のいていく。

人間は生涯を終えると、その魂は天国か地獄に送られるという。もしそれが本当ならば、純粋な人間でも悪魔でもないダンテの魂は果た

してどこに行き着くのだろうか。勝手知ったる魔界か、それともまだ見ぬ天界か、はたまたファンタジーな異世界か。

そんな事はどうでもいいか。

どこへ行こうと楽しむだけだ。

ダンテはそこで完全に意識を落とし、激動の生涯に幕を下ろした。

「っ！っ！！」

複数の男のくぐもったような怒声によって沈んだはずのダンテの意識は無理やり覚醒させられる。

しばらくは いや、いつそのこと永遠にゆっくり眠れるだろうと思っていた矢先にこれだ。どうせならとびきりの美女に揺り起こしてもらいたかったと内心独りごちる。ダンテは腹いせにその怒声の主嫌味でもくれてやろうかと思ひ、まぶたをゆっくりと持ち上げる。

「……………んあ？」

一番にダンテの視界へ飛び込んできたのは天蓋を被った7人の集団。容貌は虚無僧そのものだ。日本刀や槍で武装していることを除けば、だが。次に地面を見下ろせば、そこには石畳が敷き詰められており、そのまま視線を延ばしていくと石畳の途切れた向こうに木々が生い茂っているのが確認できる。この林はこころを囲うように

群生しているようだ。そして更に視線を上げると夜の帳の中、煌々と輝く星々。

……と、冷静に周囲の状況を確認しているようだが実際、ダンテは混乱していた。自分は死んだはずなのに何故見知らぬ場所に突っ立っているのか、まさか目の前の人間は新種のマスクドヒーローかなにかなのか、そういった疑問や推測が彼の頭の中をグルグルと駆け巡る。

うつむと唸りながら思索するダンテ。その周りの視線などまるで目に入っていない様子に苛立った虚無僧がダンテに問いを投げかける。

「貴様……人間ではないな？」

その言葉にダンテは眉尻をピクリと動かした後、ニヒルな笑みを浮かべる。

「hmm……俺の美貌が人間離れしてるって言いたいのか？ だってらもっ少し分かりやすく褒めてくれ」

イエスともノーとも採れない言葉。ダンテに答える気など毛頭ない。虚無僧は天蓋の下で顔を顰める。顔立ちがやたらと整っているだけに更に癪なのだろう。虚無僧は気分を落ち着けるように一呼吸置いた後、再度問いかける。

「……もっ一つ問おう。貴様はその穢れた親子に与する者か？」

そう言って虚無僧は手に持った日本刀の先端をダンテの背後に向かって突きつける。その切っ先が示すものを確かめるため肩越しに振り向くと。

そこには呆然とした顔でこちらを見つめる少女。そしてその傍らには自らの血で巫女服を赤く染め上げた女性の姿があった。

姫島朱乃は墮天使の父バラキエルと人間の母、姫島朱璃の間に生まれた子だ。

姫島家は代々、表向きには神職に就き、裏では悪魔や墮天使といった存在を祓うことを生業としてきた一族だ。

魔を祓う一族が魔と交わる。その前代未聞の事態に朱璃の親族達は墮天使と交わった朱璃、墮天使の血を引く朱乃を腫れ物のように扱ってきた。

幼少の朱乃が勘付くくらいには。

だがそれでも朱乃は幸せだった。

いつも優しく、時には間違いを正してくれる母。強面で無愛想で、更には家を空ける事も多いが不器用なりに自分を愛してくれる父。朱乃はそんな二人が大好きで何より大切だった。この団欒を、温もりを、いつまでも享受できるのなら他には何も要らないとさえ思っていた。

しかし、たまたま父が家を空けていた夜のこと。家族の住む神社に備え付けられた境内で母と二人で夜空を眺めていた折、突然前方から7人の虚無僧が現れる。天蓋を被ったその姿は姫島の戦闘装束。間違いないその正体は姫島の一族または縁者の類の者だ。

母娘二人の団欒が脆くも崩れ去る。朱璃はまた嫌味混じりの警告

でもしに来たのだろうかと表情を険しくする。傍らの朱乃は状況を理解できずポカンとした表情。しかし事態は朱璃が思うほど生易しいものでは無かった。

「……………やれ」

つぶやくように放たれた言葉と共に、無数の短刀が飛来する。月明かりに照らされ鈍色の光を反射するそれは、母娘に向かい突き進む。

「朱乃っ!!」

朱璃はすんでの所で反応し、朱乃と飛来する短刀の間に身を滑り込ませる。そして朱璃の体に2本の短刀が突き刺さる。

「ふん、肩口と脇腹の2箇所。致命傷は免れおったか。」

残念そうに吐き捨てる虚無僧。事実、朱璃の左肩と右脇腹には短刀の刃が半ばまで突き刺さっていた。

「くっ……………」

朱璃は苦悶の表情を浮かべ、その場で片膝をつく。

「え……………？母さまっ？」

突然の母の行動、その後の何かを押し殺すような声。それを訝しんだ朱乃は朱璃の傍らへと歩み寄る。

直後、朱乃の目に飛び込むのは母の体から滴る鮮やかなまでの赤。

「い、いせし……………いせあああし…」

境内に絹を裂くような悲鳴が響き渡る。

朱乃にとってたった一人の母。縁者たちにくら蔑まれようと笑顔だけは絶やすことのなかった母が今、身を引き裂くような痛みに耐え、その顔に苦悶の表情を浮かべている。

ささやかながらも幸せだった日常がもろくも崩れ去ったことを、目の前の現実が告げる。朱乃はその場に崩れ落ち、呻くことしかできない。

「ああ……母さま……なんで、こんな……。」

震える手足、焦点の合わない瞳。誰の目から見ても朱乃は錯乱している。

身を引き裂くような痛みに耐えつつも朱璃は。叱咤するように声を絞り出す。

「朱乃……逃げなさいっ」

絶叫。もしくは懇願ともとれる母の声に朱乃はハッと我を取り戻す。

戸惑いつつも足に力を込めて立ち上がろうとするが 虚無僧によって遮られる。

「ここで死に別れるというのも辛かるう。案ぜずとも親子揃いで御霊をあの墮天使の生まれ故郷に送ってくれる。」

仰々しくも、どこか軽蔑を孕んだ言葉。言つやいなや虚無僧たちはこちらへ向かってゆっくりと歩み出す。

一步、また一步と彼我の距離が詰められていく。近づぐことに色濃

なっていく殺気と威圧。

母娘は共に足がすくみ、立ち上がる事は愚か声を上げることすらできない。湧き上がる恐怖は心だけでなく体をも蝕んでいく。

ああ……私、死んじゃうんだ。

胸のうちでそう呟いた朱乃は、ならばいつそのことと、視線を地に伏せて今日一日ですっかり赤く腫れ上がってしまった瞼を閉じようとした。

その時。

突如巻き上がる得体の知れないエネルギーの奔流。同時に朱乃の視界の視界に影が差した。

「……………えっ？」

驚きと僅かな期待。朱乃は一度は落とした視線を上にくっきりと持ち上げる。

目に映るのは赤のコートと神秘的な輝きを放つの銀の髪。こちらに背を向けていて尚、ただならぬ様相を呈する男が月明かりを遮るように立っていた。

虚無僧に言われるがまま振り返ったダンテの目の前には、その場に崩れ落ちこちらを見上げる少女と、手傷を負い荒々しく息をする女性。少女の風貌はこの女性とよく似ている。

ダンテは目線を合わせるためしゃがみこみ二人を見つめる。数瞬間の後、先に口を開けたのは意外にも少女　朱乃だ。

「母さまが……母さまが大変なの　っ！」

ダンテは母さまと呼ばれた女性に目を遣る。意識ははっきりしているようだが出血はかなりの量で、容態は芳しくない。あまり悠長にしている余裕はなさそうだ。

朱乃に再び視線を戻したダンテは、彼に似合わない優しい声音で問いかける。

「これはあいつらがやったのか？」

「……………」

朱乃は唇をかみしめ、悔しげに頷く。

そこで今まで沈黙を保っていた女性　朱璃が口を開いた。

「朱乃を……娘を連れて逃げて！　お願い、どうか娘だけは！」

敵とも味方とも付かぬダンテに対して、朱璃は藁にも縋る想いで懇願する。

その姿を前にしてダンテの胸に去来するのは在りし日の母の姿。家族の窮地に何もできなかった幼少の自分と悪魔に対する憎悪。あれから幾年も月日が流れたがダンテはその情景を忘れた事はない。

しかし目の前の少女は違う。ダンテは力をつけ、なんの因果かこの見知らぬ母娘の前に降り立った。

自分は救いになることができる。この少女に自分と同じ仄暗い過

去を背負わせなくても済むのだ。

ダンテは静かに決意を固め、そのための手段を模索する。再び数瞬間の後、告げる。

「悪いが女一人おいて逃げられるほど腐っていないつもりだ。それに……育児の経験もさっぱりだね」

だから、とダンテは続ける。

「ここは俺のやり方を通してもらう。」

その言葉から母娘はダンテが何をしようしているのか汲み取ることはできない。だがその瞳に宿る強い決意の色を前にすると何も声に出すことができず、彼女たちはただ黙して頷くことしかできなかった。

「ああ、そうだ。そっちの将来有望そっちなお嬢ちゃんは目を閉じてな。」

「え？」

朱乃は怪訝そうに首をかしげる。対するダンテは不敵な微笑を浮かべ、虚無僧たちに向き直りつつ告げた。

「ここから先はR指定だ。」

不安や揺ぎなど微塵も感じさせない背中。対照的に夜風を受けて静かにたなびく赤いコート。その立ち姿は朱乃の心に鮮烈なまでの憧憬を抱かせた。

虚無僧たちに向き直ったダンテはまず武装の確認をする。魔具は手元に無いが、彼の愛用する二挺の大型拳銃工ボニー&アイボリーはしっかりと腰のホルスターに収まっている。元々、人間相手の闘争に首をつっこむ際には愛剣リベリオンを使うことすら珍しかったダンテだ。この双銃だけでも何ら不足はない。

数瞬の間に一先ずの確認を終えたダンテは虚無僧たちに告げる。

「悪いが時間が無いんでね、手早く終わらせてもらっせ」

「何だと？」

この人数差を前にしてもまるで己の勝ちを疑わないダンテのセリフに虚無僧が怪訝そうに聞き返した。

しかしダンテから応答はなく、その代わりとばかりに彼は右腕を真横に突き出す。その指先は軽く握りこまれた状態で。

意図の読めない突然の行動に虚無僧たちは身構えるがもう遅い。彼がこの力を発動させるのに必要なのは『意思』のみだ。突き出した腕は気分を盛りたてるスイッチでしかない。詠唱すら必要の無いそこに虚無僧たちが介入する余地などなかった。

「Keep still(じっとしてな)」

ダンテの言葉と同時にパチンと音を立てて指が鳴らされた。瞬間、世界は彩りを失い、白と黒の二色　モノクロに染められる。

今、彼が行使している力。それを彼は便宜上『クイックシルバー』と呼んでいる。この力は魔力と引き換えにダンテ以外のすべてを『遅滞』または『停滞』させる。その効果範囲は相対するものの動きのみに留まらず、その五感や思考、果ては重力から慣性までに効果を及ぼす。この世界ではいわばダンテのみが数十倍にも加速することになる。

ダンテはホルスターからエボニー&アイボリーを引きぬくと、即座に発砲する。彼の庇護を受けた長大な双銃はこの力の支配下でも従来の性能通りのスピードで鉛玉を吐き出して行く。人智を超えたフルオートさながらの連射力で射出される銃弾は虚無僧たちの四肢、それも肘や膝といった関節を的確に打ち抜いていく。

そうして銃弾は一発の漏れすらなく虚無僧たちを撃ちぬいた。しかし彼らは重力すらも遅滞させられたこの世界の影響下にあり、仰け反った状態で宙に浮いたままだ。

ダンテはエボニー&アイボリーをホルスターに差し込む。あまりに一方的な戦闘に物足りなさを感じつつも再び呟いた。

「Time to up (時間切れだ)」

すると世界に色が戻る。時が正常に回りだし、それと同時に慣性が働き出す。規格外の威力を持つ銃弾をその身に受けていた虚無僧たちは思い出したかのように石畳の向こうへと吹き飛ばされていく。これも『クイックシルバー』が生み出す風物詩だ。

吹き飛ばされた虚無僧たちが誰一人として起き上がらないのを確認したダンテは朱乃たちへと向き直る。

「よし、もう目開けていいぜ、お嬢ちゃん」

「…………あれ？ あの人達は？」

タンテの体が視界を遮っているため、朱乃からは虚無僧たちの姿が見えないらしい。しかし後ろの光景は文字通りのR指定だ。この年齢の少年少女には惨すぎる。

とりあえずタンテは話を逸らすことにした。

「さあな。それよりお母様の心配しなくていいのか？」

「あつ…………母さま!!」

やはり朱乃にとって虚無僧の事など母親への心配には勝らなかつたようで、すぐさま朱璃へと駆け寄る。飛びつく朱乃の頭を何度も撫でながら朱璃は口を開く。額には玉のような汗を浮かべ息も荒いが表情は先程より柔らかい。

「ありがとうございます。なんてお礼をしたらいいのか…………」

「礼ならツケといてやる。それより手当てが先だ」

「え、そんな…………きゃっ!？」

タンテはこの期に及んで自身を顧みない朱璃にもどかしさを覚えるも、とりあえずの処置を施すため彼女を横抱きにしてヒョイと持ち上げる。その手つきは彼にしては珍しく壊れ物を扱うように丁寧だ。一方の朱璃はというと怪我も忘れて生娘のようにきゃあきゃああと喚いている。恋愛など数えるほどしか経験せず、ある日突然今の夫と駆け落ち同然で飛び出して今に至った彼女だ。夫以外の男性に対する

免疫がないのも仕方ないのかもしれない。

すると今まで二人を見上げるばかりだった朱乃は何か思いついた素振りで「取ってくる！」と言葉を残して神社へと一目散に駆け出した。きつと手当ての為の道具を取りに行ったのだろう。この年にしてはなかなか気の利く嬢ちゃんだとダンテは感心する。

敵は無力化し終え、治療道具ももつじき届く。その安堵感と朱璃の初々しい反応も相まって場の空気が和らいでいく。

しかし、ここに居る誰もがこれから手当てをするにあたっての重要なファクターを見落としていた。

「……さて、この俺がケガ人の手当てするなんて何十年ぶりだろうな？」

朱璃の表情が僅かに引きつった。

その後、とりあえず神社の軒先に朱璃を横たえたダンテはタイムイングよく治療道具を持ってきた朱乃と共に手当てを始めたのだが……作業は困難を極めた。

ダンテの処置は以外にも的確だった。だったのだが、その工程でダンテの手が触れる度に朱璃が艶めかしい声を上げるのだ。その声の原因は痛みによるものかその他によるものかダンテには判断は付かない。ただその様子を訝しげに見ている朱乃の視線がダンテには辛かった。

そんなこんなでやっとのこと治療を終えたダンテは軒先で一息つ

く。隣には失血と今日一日の疲れで眠っている朱璃、反対側には朱乃が座っている。朱乃はダンテを見上げつつ口を開く。

「なんで……助けてくれたの？」

「ああ、なんでだろうな。なんとなくじゃダメか？」

「うん」

ダンテが何故この母娘を助けたのか。その理由私怨、エゴにも等しい醜いものだ。できれば追求は避けたい。しかし、それではこの少女は納得しないだろう。ダンテは仕方なく苦笑しつつも答える。

「ガキの頃、母親を殺されたんだ。目の前でな」

「……え？」

「だから同じ境遇のお前らを放っておけなかった。それだけだ」

母親を殺される。思えば自分も一歩間違えばそうになっていた、有りえたかもしれない未来。朱乃はそれを人事だとは思えなかった。しかしそれと同時になぜこの男はそれを些事のように言っているのか不思議でもあった。

「なんで何でもなかったみたいに言えるの？ 悲しくなかったの？」

「そりゃ悲しかったさ。だが、いつまでもそうしていられない。悪魔は泣かないもんさ」

かつてダンテとそのパートナーが言った言葉、『悪魔は泣かない』。なんの気なしの思いつきのセリフだ。しかしその言葉はダンテが確

かに人間の心を持ち合わせている事を強く裏付けてくれる。

そんなこと知る由もない朱乃はまるでダンテ自身が悪魔であるかのようなセリフに対して怪訝そうに聞き返す。

「あなた、悪魔なの？」

「ああ。といっても半分だけだがな」

「私も悪魔になつたら強くなれる？」

悪魔の存在を疑いもせず、更には自らも悪魔になりたいと言い出す朱乃。こんなことに巻き込まれている手前、もしかしたらこの少女は悪魔の存在を認知しているのかもしれないとダンテは推測する。悪魔に魅入られ、破滅に追い込まれた人間を彼は幾人も見てきた。そのどれもが悲惨な末路をたどっている。それはこんなたいげな少女が迎えるべき結末ではない。

「さあな。でもおすすめはしないぜ」

「なんで？」

しかし馬鹿正直にそれを伝えるのも憚られる。悪魔に憧れた男は実の娘に脳天をブチ抜かれたなどと口が裂けても言えない。ダンテは面倒だがそれとなく朱乃をいなそうとする。

「なんでって、そりゃあ　ッー！」

彼が語りだそうとしたその瞬間、前方の境内から一筋の光線が飛来する。

その光線の速度は凄まじく、明確な殺意が込められている。しかしそれは咄嗟にダンテが突き出した右手によっていとも容易く相殺された。

「なんだ、一撃挨拶だな？」

敵の第二波が来たのだと推測し、不敵な笑みと共に腰の双銃を抜き放とうとするダンテ。だがそれは朱乃の叫びによって中断を余儀なくされる。

「父さまっ!!」

父様。そう叫ぶ朱乃の視線を追い、先程の攻撃が放たれたと思われる方向を見てみると……確かに居た。殺気をほとばらせた男が憚然とした表情でダンテを睨んでいる。父様と呼ばれたその男の顔の作りは朱乃とは似ても似つかない。むしろ正反対だ。いかにも武人といった風貌で、清純さなど微塵もない。

父様じゃなくて軍曹殿の間違いじゃねえのか？ とダンテは内心毒づくが朱乃の様子を見るに間違いでは無いらしい。その男は無事な朱乃の様子を見て一瞬表情を和らげたが、すぐに引き締めるとダンテに視線を戻す。

「貴様っ！ 悪魔か!？」

ここでは初対面の人間は悪魔だと疑うのが普通らしいとダンテは結論付ける。本日二度目となったセリフに辟雍する。それに馬鹿正直に答えるのも悪手。唯でさえあの男は今にも飛び出さんばかりにこちら睨んでいるのだ。悪魔に恨みがあるのか知らないが、ここでイエスと答えればすかさず飛び掛ってくるだろう。

とりあえずダンテの存在がこの場の緊迫を生み出しているのは確かだ。ならば早々に立ち去ろうと彼は行動に移す。

「さて、邪魔しちゃ悪いし退散させてもらおう」

「ま、待て!!」

言うなりダンテは林の中へ飛び去っていく。あまりの引き際の良さに父様と呼ばれた男性は啞然とし、引き止めようとすもダンテの疾走は止まらない。もとより林はかなりの密度で群生していたためダンテの姿はすぐに見えなくなり、気配もほとんど感じ取れないほどに遠のいていく。

境内には親子3人が残された

主殺しの悪魔

日本に点在する地方都市のひとつ、『駒王町』。この町の中心部から遠く外れた寂しげなストリートの一角に『Devil May Cry』と書かれたネオンを掲げる事務所がある。

事務所を入れればまず目に入る年代物の重厚な椅子と黒檀のデスク。そこに腰を掛けデスクに足を放り投げるのは赤いコートと銀髪の男。ダンテ。彼は気だるげな表情で『この世界』についての事実と現状をゆつくりと反芻していた。

ダンテは神社の境内での一件の後、とりあえずは現状を把握するため手当たり次第に各地を転々とした。そして彼は最大の発見にして大前提ともいえる事実に行き着いた。

どうやらここは自分の居た世界とはまったく違う世界らしい。

異世界なるものが本当に存在しているなど甚だ信じられないが、元居た世界とこの世界とのあらゆる相違点からダンテもここが異世界だと信じざるを得なくなった。

まずこの世界には彼の父親である魔剣士スパイダについての伝承やそれに類するおとぎ話などは欠片ほども存在しない。

そしてこの世界の悪魔は元居た世界の悪魔とはだいぶ性質が違つ。それどころかまったくの別物だ。

この世界の悪魔は下級の存在であつても人語を理解する上、理性も併せ持っている。そのため妄りに人間を襲うことはしないし、むしろこつそりと人間界に住み着いている者も存在するらしい。

更にこの世界には悪魔以外の人外も存在する。天界には天使、冥界のもう半分には墮天使、その他にも北欧やアイルランドの神話の神、ドラゴンや妖怪といった生命体も存在する。

この中でも天使、墮天使、悪魔は三大勢力と呼ばれる。彼らは過去数千年前に三つ巴の戦争を起こし、互いにその数を大幅に減らした。『悪魔の駒』などはそれに対応するための施策ともいえるだろう。

もちろん、多くの人間はその戦争どころか彼らの存在も知ることはなく、人外たちも人間の前には姿を現さず、正体を隠して行動するなりしている。例に漏れるものも存在するが……。

次に明らかになったのはダンテ自身のことだ。

こちらに転移した際にどういう理屈かダンテは若返った。魔帝の騒動があった頃まで容姿が巻き戻っているのだ。死んだ筈が異世界に転移、そして容姿が若返る。まるで説明のしようが無い事象にダンテは考えるのをやめた。

そして戦闘の要である魔具だが、これまた頭の痛いことに見知った魔具のほとんどがダンテの体に魔力球の状態で格納されている。借金形の形として喜んで売り払った魔具たち、さらには魔剣スパードまでもがそろっている。

ダンテは死ぬ直前、手元に残っていた魔具は売り払い、魔剣スパードは後継者へと引き継いだ。そのはずなのにすべてが手元に戻ってきている。これにはさすがに首を捻った。魔具に眠る悪魔たち比較的話の通じるネヴァンやケルベロスに話を聞いてみたが、彼らにもこの状況は説明できないらしい。結局ダンテは考えても仕方がないと割り切り、有効活用していく方向に考えをシフトした。実は悪魔

の住む冥界と人間界を行き来する際にこの魔具たちが役立つのだ。

そんなこんなで数年を費やして大体の現状を把握したダンテは、はぐれ悪魔狩りやその他の依頼で稼いだ資金を投じて元居た世界同様に便利屋『Devil May Cry』を開業するに至った。

この『Devil May Cry』は表向きには便利屋。裏では、はぐれ悪魔や指名手配された人外達の討伐を請け負っている。

しかしこの駒王町という場所は現魔王の一人、サーゼクス・ルシファーの妹であるリアス・グレモリーの管轄地でもある。ダンテは彼女に面識など無い。更に無断でこの地に事務所を開業している。そのため討伐依頼は目立たぬように処理しなければならぬし、彼女に先手を打たれてしまうこともある。結果、近頃のダンテの懐は大寒波に覆われている。これではピザどころか酒すら飲めない。

金を借りようにも戸籍すら無いダンテの社会的信用は小学生以下。リアス・グレモリーに文句を言うのも流石にお門違い。むしろ場所代を請求される恐れもある。ここ最近は何も知らずにこの街に事務所を建てた過去の自分を恨むばかりだ。

このままではマズい。ううむと唸るダンテの思考は、唐突に開かれたドアの音で遮られる。

「んっ」

両開きの重厚なドアが開かれ、姿を表したのは艶やかな黒髪を腰まで垂らした着物の女性だった。

その着物は花魁もかくやというほどに肩まではだけており、豊満な双球は今にもこぼれ落ちそうなほど。裾丈はミニスカートさながら

に短く、そこから伸びる足は健康的ながらも艶めかしい。妖艶の一言に尽きる美しさだが、体にはいくつもの生傷が走っている。

ダンテは女性をじっと見据える。ダンテの気を引いているのは肢体でも生傷でもなく女性の周囲に漂う独特な魔力。何らかの術で素性を隠しているようだが、ダンテも長年伊達にこの稼業をしているわけではない。そして何よりダンテに流れる人魔双方の血が彼女の正体を見破る。

この女、十中八九悪魔だ。

深夜に美女の来客。しかも正体は悪魔。ダンテはそのシチュエーションに若干の懐かしさを覚える。考えるより先に口が動いていた。

「トイレなら裏だぜ。急ぎな」

至極当然といった顔でさりりと言いのける。女性は一瞬呆気にとられた様子を見せるが、即座に気を取り直して答える。

「遠慮するわ。それより『Devil May Cry』の店主のダンテってあなたでいいの？」

「ああ。俺で間違いないが、こんなしがない便利屋に何の用だ？ そのケガの治療をしたってんならお断りだぜ。ここには飲料用のアルコールしかおいてないんでね」

飽くまで『しがない便利屋』であるのと嘯き、更には見当違いな事を言い出すダンテ。しかし女性はダンテの軽口にはまったく取り合わない。

「表では便利屋で通ってるみたいだけど、こっちの世界では相当有名

よ、あなた」

「へえ、どんな風に？」

「気に入らない依頼ならどんな大金積もうと跳ね除ける偏屈者だけど、実力は折り紙つき。類まれなセンスと多彩で強力な攻撃手段。それらを持ち合わせながらも飽くまで戦闘を楽しもうとするスタンス。そのイカれた戦いぶりです」悪魔も泣き出す『デビルハンター、だなんて呼ばれてるわよ」

「そりゃ光栄だ」

『Devil May Cry』悪魔も泣き出す『それはダンテにとって前の世界でも散々言われて食傷気味な通り名だ。応対も素っ気無くなる。聞いておきながらさしたる興味も示さないダンテに着物の女性はムツとした表情を作る。それにここ最近鳴いているのはどちらかというと閑古鳥だ。

「それで、『悪魔も泣き出す』デビルハンターに悪魔がなんの用だ？」

「……………」

言葉の後、女性の顔が強張った。気配を隠す術はお得意のようだが腹芸までは得意とはいかないらしい。ダンテは意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「そう構えるなよ。話なら聞いてやる。どうやらワケありのようだしな？」

女性は足元に視線を落とし幾分か思案し始めた。だがそれもすぐ終わったように再び金色の双眸でダンテを見つめる

「私を匿って欲し……ッ!？」

突如、けたたましい音を上げて玄関ドアが蹴り破られた。

開け放たれたドアから5人の集団がなだれ込んでくる。それぞれが魔術師然としたローブを羽織り、深々とフードを被っている。女性は反射的に振り向くと同時すぐさま後方に飛び退いてダンテの側につき、それに相対するように魔術師達が構える。

状況から察するにこの女性はお尋ね者のようだ。どういう理由でここに逃げ込んだかは定かではないが、この女性が面倒事を運んできたのは間違いない。ダンテはつくづく自分は女運に恵まれないようだと嘆息する。しかし本心は新たな騒乱への期待に打ち震えていた。

ヤバい仕事は大歓迎だ。

「ママにドアの使い方を習わなかったのか？」

先程まで女性に集中していた視線がダンテに集まった。そしてダンテのど派手な服装とそれが違和感なく似合う容姿に呆気にとられる。

ダンテは集まった視線にひとしきり満足した後、ドンツという鈍い音と共にデスクの上に立ち上がった。デスクに足を放り投げた状態から。一切予備動作の無い、曲芸とも言える挙動。とんでもない脅力に魔術師達は更に目を剥く。が、直後、即座に顔が引き攣る。

なぜならデスクから魔術師達を見下ろすダンテの両手には、到底人間には扱えないであろう長大な二丁の銃。エボニー&アイボリーが握られ、その銃口が彼らに向けられていたからだ。

ダンテの顔に浮かぶのはイタズラが成功した悪ガキさながらの微笑。だがそれとは対照的にアイスブルーの双眼は獲物を狩る猛禽のようにキラキラと輝いている。

もはや一方的に場の主導権を握ったダンテはこれまた一方的に死刑宣告を言い放つ。この状況の元凶であるはずの女性を置き去りにして。

「さあ、Ha ha!! 派手Let's にrock!! くぜ!!」

まず戦闘の口火を切ったのは、けたたましい銃声だった。

魔力を用いた砲撃線で従来の重火器による攻撃など障壁を張ってしまえば牽制にもならない。そうタカをくくった魔術師たちはシングルアクションで簡易な障壁を張る。

「ゲッ……!?!」

しかしダンテが握る双銃の威力は牽制にはとどまらず、一発でも被弾すればその部位ごと吹き飛びかねない威力だ。しかもその凶弾はフルオートさながらの連射力で発射される。

顔を歪めた魔術師たちは咄嗟に障壁を重ねがけて展開することで難を逃れる。だがそれも気休め程度にしかない。

劣勢と判断した魔術師達はすぐさま体に強化の魔術を施し、一斉に地を蹴り後退した。そして後退した先で身を寄せ合い、互いの魔力を結集させることでより強力な障壁を展開する。

新たに展開された魔力障壁はそれなりに強力でしつかりとエボ
ニ―&アイボリーの凶弾から魔術師たちを守っている。しかし障壁
の維持に手一杯で攻撃にまで手が回らない。

ダンテとしてはこのまま根競べと洒落込むのもいいが、それでは華
がない。そう思い立つと銃をくるりと回した後ホルスターへ押しこ
む。

「鉛玉はお気に召さないって顔だな。それじゃ　こいつはどうだ
？」

言葉の後、ダンテの右手に一振りの大剣が顕現した。

剣の刀身はダンテの身長ほどもあり、刃は綺麗な曲線を描き鉄塊の
ように分厚く、それでいて鋭利。持ち手には煌々と赤く光る瞳がはめ
こまれた髑髏の装飾があしらわれ、その禍々しさに拍車をかける。

その剣の名は「リベリオン」。幾万の同族を、悪魔を斬った父スパー
ダの形見の1つ。

魔術師達はこの距離でも空気を介して伝わるその大剣の圧倒的な
存在感に目を奪われ、足を竦ませる。

呆気にとられる魔術師たちを尻目にいつの間にかデスクから降り
たダンテはリベリオンを逆手に持ち変えた。そして大きく後ろに引
き絞り腰を落とす。同時にリベリオンの刀身へ魔力が蓄えられ、バチ
バチと赤いスパークが飛び散る。

その音と魔力の余波でやっと気を取り戻した魔術師達は愕然とす
る。

あれはマズい。

これだけの莫大な魔力を指向性を伴って放出されれば、その破壊力たるや相当のものだろうと予測できる。

「全員、ありったけの攻撃を打ち込めッ!!」

ならば攻撃が発動する前に全力をもって打ち消すしかない。半ば破れかぶれの思考でそう判断したらしい魔術師達は色鮮やかな魔弾をダンテ目掛けて斉射する。それぞれの威力は上級悪魔の一撃にも匹敵する程に強大だ。

しかしダンテの微笑は途絶えない。

もうすぐで直撃する　というタイミングで遂にダンテは逆手に持ったリベリオンを振り抜いた。

「突っ走れ! Drive--」

瞬間、リベリオンから赤い斬撃が射出される。呆れるほどの強大な魔力が斬撃を飛ばすという絵空事を実現させる。分厚くそれでいて鋭利なりベリオンの刀身。その生き写しともいえる赤い斬撃は、殺到した魔弾を霞のように消し飛ばし、勢いそのまま魔術師達に飛来する。

「はあっ?」

魔弾の群れを突破してもまるで威力の衰えを見せない真っ赤な斬撃が魔術師5人に迫る。咄嗟に障壁を張ろうとするが後の祭り、そのスピードは先の魔弾の比ではない。

斬撃は直撃した後、彼らの意識を刈り取り呆気無くドアごと店外へと吹き飛ばした。

馬鹿げている。女性は内心呟いた。

あの魔術師達は、はぐれ悪魔の討伐のため編成されたチーム。それも主に上級クラスの悪魔を対象とした。だと聞き及んでいる。もちろん実力は折り紙つきで、生半可な実力でどうこうできるものじゃない。それをこの男はたった一回の斬撃で一蹴した。圧倒的な力を目前にして女性はただ立ち尽くすのみだ。

そこで不意に声かけられる。

「さて。勝手に美味しいとこ貰っちゃったが、問題ないよな？」

「え、ええ。……むしろお礼を言わせてもらいたいぐらいだよん」

「そりゃよかった」

先の戦闘をまるで些事だとも言わんばかりの口調。いや、実際そうなのだろう。あれほどの魔力をぶっ放しておきながらダンテはまるで消耗した様子を見せない。

女性の目的は、目障りな魔術師達を追っ払ってもらうことだった。そのためにこちらの事情を話そうとしたのだが、思ったよりも魔術師達の到達が早かったためそれをせずとも済んでしまった。ならば早々に立ち去った方がいいだろう。

そうと決まれば話は早い。女性は「それじゃあ」というとなるべく

自然な仕草で出口に向かいツカツカと歩こうとする　　が、途中で大きな人影に阻まれる。その人影の正体は言わずもがなダンテだ。

意地の悪そうな笑みを浮かべたダンテは話を切り出す。

「俺もお前の面倒事に巻き込まれたんだ。こつなつた事情は話してくれるんだよな？」

話すかどうかの判断は女性に委ねる。そんな体裁をとっているが、その語調と鷹のような瞳は強く話せと告げている。

強行突破で逃げ出す事も考えるが、却下。実力は拮抗どころか向こうのほうが遥かに上だろう。それにあの得体の知れない魔剣。あれはきっと悪魔にとって猛毒だ。矛盾しているようだが女性はそう感じた。あんなもの、振りかぶられただけで心臓が止まってしまふ。

自分が入り込んだのが便利屋などではなく虎穴だったことに今更ながらに気付かされる。

遂に観念した女性はつらつらと昔話を語り出す。

「それで……」つっそり妹を見るためにこの町に来た訳が

着物の女性　　黒歌は、猫又という妖怪の分類の中でも希少な猫魑という種族らしい。幼い頃に両親は他界し、残されたのは自分と妹だけ。身寄りもないためしばらくは各地を放浪していた。

その際に希少な種族というのも手伝ったのか、とある上級悪魔から二人の保護を名目として眷属としてのスカウトを申し込まれた。自

身が眷属として悪魔に転生すれば妹の面倒も見てくれるというので黒歌はコレを快諾した。

しかしある日、主である上級悪魔が黒歌に肉体関係を強要してきた。さもなければ妹を人質に取る、と言って。主が姉妹を気に入った理由は猫魅としての力だけではなかったのだ。確かに受け入れれば苦しむのは自分だけで済む。しかし妹の容姿は黒歌に似て可愛らしい。なし崩しに妹まで巻き込まれる可能性も否定できない。

進退窮まった黒歌は主である上級悪魔を殺害。その後逃亡し、はぐれ悪魔の仲間入りとなった。

そしてはぐれ悪魔生活も板についてきたところで妹がリアス・グレモリーの眷属になったという情報を聞きつける。それで黒歌はリアス・グレモリーの居住地兼管轄地のここ駒王町に赴いたのだ。

黒歌の過去に対する是非はともかく、ダンテとしては納得できない点が1つあった。

「なんでワザワザここに逃げ込んだんだ？」

「ここ『Devil May Cry』は人に仇なす人外を狩ることを稼業としている。はぐれ悪魔など迷い込めば、ダンテの人柄次第では即行で狩られる可能性もあった。」

「ごく当然の疑問。だが、返ってきたのはなんとも歯切れの悪い回答だった。」

「えっと、その……なんとなくだにゃん」

「へえ、『なんとなく』ねえ。まあ理由はどうあれ知らぬ間に美女の信

頼を勝ち得るなんて男冥利に尽きるね」

気障ったらしいセリフにわざとらしい身振りを付け加えるダンテ。無策さを皮肉られた黒歌の頬がヒクヒクと引き攣る。妙に様になっている点が腹立たしさを助長するのかもしれない。

なんとなくで火中とも言える場に身を投じる丹力にはなんとも恐れ入る。しかしその点ではダンテも人のことは言えないので口には出さない。それにしても主に牙を向いた悪魔といえは懐かしいかつての相棒が思い出される様な経歴だ。

この黒猫ならうちの閑古鳥を追っ払ってくれるかもしれない、と唐突に閃いたダンテは話を振る。

「それはさておき、俺から1つ提案があるんだが」

「……提案？」

「ああ。簡単に言えば契約だ」

契約。そこはかたなく物々しい響きに黒歌は顔を強ばらせる。

ダンテは契約と聞くやいなや警戒心を顕にした黒歌に苦笑する。さっさとこの面倒くさそうな黒猫の誤解を拭うべく手をひらひらとふりつつ付け加える。

「そう身構えるなよ。あんたにやって欲しいのは俺に依頼を持つてくること。それだけだ」

「依頼って、はぐれ悪魔討伐の？」

「ああ。依頼でも情報でもなんでもいいぜ。その替わりと言っちゃなんだが、ここを自由に使ってくれていい。なんなら転移用の魔方陣でも置いてくれていいぜ。」

さらっと何でもないとのように言いわけするダンテだが、この業界の人間としてはとんでもないことだ。情状酌量の余地があるとはいえ、はぐれ悪魔を泳がし更には匿うなどコトが知れば各勢力に睨まれることは必定。最悪、悪魔側から指名手配される可能性もある。

黒歌にしてみれば大して負担にならない降って湧いたような話だが、ダンテの負うリスクが大きすぎる。

「そんな虫のいい話信じられる筈ないじゃない。なにか裏があるんでしょ？」

「特に何も無いんだが……まあいい。それじゃこの話はなかったことに」

「待つにゃんツ!!」

「……なんだよ？」

食いつきが悪い上に予想以上の警戒心。そんな黒歌が面倒になつてきたダンテは一転、早々に話を切ろうとするが、黒歌が反射的に待ったをかける。対するダンテの表情はやはり面倒だとも言いたげだ。

「そこは普通もう一押しするところじゃないのかにゃん!？」

「生憎俺は普通じゃないんでね。それに普通じゃないのはお互い様だ

る？」

「……」

ダンテという男は風貌から実力まで普通どころかその真逆にぶっ飛んでいるのは一目瞭然だが、言われてみれば黒歌の境遇も普通とは言いがたい。黒歌は苦々しげに呻き黙り込んでしまう。

黙って俯く黒歌の姿はそれだけでいちいち絵画じみた神秘性を演出するが、生憎ダンテは高尚な芸術観など持ちあわせていない。

「この話、乗るのか乗らないのかどっちだ？」

ダンテは大胆にも二択を叩きつける。

まず黒歌にしてみれば逃亡生活をしている上で入ってくる同類の情報などいくらでもある。表には出せないような内容の依頼なら渡りをつけることはできなくもない。ダンテが要求を満たすのはそう難しくないのだ。

そしてその要求の見返りとして強力な用心棒付きの隠れ家が手に入る。さらにここは妹の様子をこっそり見に来るためにうつつけの立地。室内が御世辞にも　いや、かなり手入れが行き届いていないのが気になる点だが。

だが黒歌が真に懸念しているのは室内環境ではない。重要なのはこの男が信用するに値する人物かどうかという点だ。

今日一日で黒歌と男が交わした言葉の数は人柄を知るために十分とは言いがたいが、その中で分かった事が一つある。この男の底はまるで見えない事だ。

まずこれほど裏で有名なものにもかかわらず素性が全く知れていない。実力は想像の遙か上を行き、さらにその奇怪な戦闘スタイルが彼の得体の知れなさに拍車をかけている。

だが一方で悪人なのかというところもさういふ訳でもない。一応はこちらの怪我を気遣う素振りも見せたし、その実力に相応した理性も垣間見える。手放しに信頼はできないが、ビジネスの上でなら多少の信用は置けるかもしれない。それに丁度ここ最近を追っ手との抗争が激化しており、なんらかの手立てを立てなければならぬと思っていたところだ。

ならば信じてみてもいいんじゃないか　　リスクリタールの計算を終えた黒歌はゆっくりと頷く。

「わかった……。この話、乗るにゃん」

「そうか」

幾重もの思案の末、黒歌は搾り出すように肯定の意を述べた。それに対してダンテの返答はなんとも素っ気ない。ただその口元は満足気な微笑をたたえているが。

「ああ、そういえば自己紹介がまだだったな。俺はダンテだ。よろしく頼むぜ？」

「変な名前ね。さっきも言ったけど私の名前は黒歌。こちらこそよろしく」

二人は改めて互いの名を言い合つと、どちらともなく歩み寄り友好の証とばかりに握手をする。

と、「ここ」でダンテの表情が急に引き締まる。なにかあったのかと黒歌は首を傾げるがさすがに表情からはその機微は悟れない。

互いに見つめあい幾分かの間が過ぎた後　唐突にダンテは握手した状態の黒歌の手を引き寄せる。

「じゃっ!」

黒歌は予想外の事態に為す術なく引き寄せられる。そして慣性の法則に従いダンテの胸元にすっばりと収まる。黒歌の肩にはいつの間にかしつかりと彼の腕が回されており、退くこともままならない。

混乱した黒歌の心中を知ってか知らずか真剣な面持ちのダンテは口を開く。

「ここからは個人的な頼みなんだが聞いてくれるか？」

このシチュエーションで個人的な頼みなどと言われたら導かれる解はひとつ。ピンクな妄想が黒歌の脳内を駆け巡る。結局はこの男も体が目当てだったのかと失望するがその反面、受け入れてもいいと思ってしまう自分がいるのだ。

あれだけ頑なに主との関係を拒んだ黒歌だが、ダンテにならないと思ってしまう。ダンテにはそう思わせるような魅力がある。そのアイズブルーの瞳に見つられるだけで思考を蕩かされ、硝煙の匂いはこのムードにスパイスを与える。悪魔に魅入られるとはこのことを言うのだろうか。

すっかり蕩けきった表情の黒歌は所在なさげな左手を胸元でぐつと握る。

「……………うん、聞かせてっ?」

「11」の後片付けと表でノびてるやつらの処理をたのむ」

「はい……っで、え？」

「俺は寝るからなんかあつたら起こしてくれ」

そう言うなりダンテはツカツカと二階に上がって行ってしまつ。取り残された黒歌はポカンとした表情のままだ。周囲には大きくえぐれた床板と、斬撃の余波で吹き飛んだ多数の家具が点在していた。

「ッ!!」

やがて我に返つた黒歌はアワアワと声にならない叫びをあげる。ダンテの思わせぶりな態度にも腹が立つが、不覚にも期待してしまつた自分が一番恥ずかしい。何をするにもままならない黒歌はしばらく風船のようにペタンと座り込んでしまふ。

真っ赤な顔を手で覆い隠して黒歌はぼそりとつぶやく。

「こんな私のキャラじゃないじゃん……」

その声は誰も居ないこの一室によく響いた。

『Devil May Cry』
異世界だろうとダンテが『悪魔も泣かせ』なのは違いない。

斜陽と墮天使

便利屋『Devil May Cry』、その店内でダンテは今日もデスクに足を放り投げて寛いでいた。まるで清掃がなっていない室内を気にもせずには彼は雑誌を読み進めている。

すると、ジリリリとけたたましい音を上げて机上に備え付けられた電話が鳴る。

2コールほどそれが鳴った後にダンテは今まで読んでいた雑誌をボタンと閉じ、次いでもむろにデスクを蹴りつける。その衝撃を受けた受話器はたまらんとばかりに宙に飛び上がった。ダンテはクルクルと回りながら飛翔するそれを掴み取る

「デビルメイクライ……ああ黒歌か」

第一声こそはよそ行きの口調で取り繕ったダンテだが、電話の相手が誰だか分かると途端に砕けた語調に変化した。他人の無駄話を好まない性質の彼は、すぐさま本題を聞き出す。

「それで、今日はどんな耳寄りな情報を仕入れたんだ？」

せつかちな催促に電話口の相手は不機嫌になりつつも、これも毎度の事のように努めて冷静に報告を進めていく。

「……へえ、確かにそいつは怪しいな。分かった。こっちでも調べておく」

やりとりを終えたダンテは乱雑に受話器を放り投げる。ガチャッと元あった場所へ見事に納まったそれを眺めながらダンテはハアと

ため息をついた。

「墮天使」一行様が招待状も無しに敵地を散策か……いいご身分だ」

ダンテは心底面倒そうに吐き捨てた。酷く気落ちした様子の彼だが、そこでふと墮天使という種族の特徴を思い出す。

「そういえば墮天使の女ってのは、美人揃いだって聞いたな……いいね、やる気出てきた」

ダンテのモチベーションがV字を描いて再上昇する。景気づけにデスクをドンと叩くとコートを翻し、活き活きとした足取りで玄関ドアに歩みだした。

人間だろうと悪魔であろうと男の気分を盛りたてるモノはきっと同じに違いない。

「死んでくれないかな？」

夕暮れ時の公園。駒王学園2年生変態3人組が一人、兵藤一誠はその一言に困惑した。言葉を放ったのは目の前の美少女、天野夕麻だ。一誠は彼女と出会ってから日が浅いが、だからこそ彼女とのやりとりは全て鮮明に記憶している。今日のデートだって完璧とは言えないが、怒らせるようなことをした覚えは微塵もない。

きっと聞き間違いに違いない。そう思考を区切った一誠は訊き返した。だが、

「死んでくれないかな」

彼女ははつきりと言った。笑いながら。聞き間違いでは無いなら彼女なりの冗談なのかも知れない。むしろそうであって欲しい。懇願にも似た想いで一誠は次の句を述べようとした、その瞬間。

バツと彼女の背中から黒い翼が生えた。天使の羽ともカラスの濡羽とも例えられるそれは彼女の容姿と相まって幻想的な雰囲気醸し出す。

突然の出来事に目を剥く一誠をよそに彼女は告げた。

「初々しいデートをありがとうとっ、一誠くん。ままごとあそびみたいで微笑ましかったわ」

彼女の声は冷たい。そして口元には冷笑。

するとドンツと鈍い音がする。と同時に腹に何か触れたような感触がした。一誠が腹部を見下ろすとそこには光を槍状に収束させたような物体が己の腹を貫通していた。やがてその槍は霧散し、ぽっかりと穴の空いたそこからおびただしい量の血液が噴きだしていく。

「私たちにとってあなたは邪魔なの。恨むならその身に『神器』を宿させた神を恨みなさい」

一誠はその言葉を問いただすこともできずに崩れ落ちる。次第に意識が遠のき、死が近づいてくるのを実感する。

一誠の思考に浮かぶのは父や母、友人たちの顔。自分が死んだと聞いたら彼らはどんな顔をするだろうか。そんな事を考える。

そして今尚、流れていく自身の血を眺めていると唐突に浮かんでく

るものがある。それはあの紅い髪をした美人。見かけるたびに鮮烈に目を引くあのストロベリーブロンド。どうせ死ぬならあんな美人の腕の中で死にたかった。

そんな折、内心で独り言ちる一誠の耳が誰かの声を捉える。

「なんだこりゃ、痴情のもつれか？」

この惨状を前にして、とぼけた調子で誰かが言った。余裕の溢れた声音に不思議と安心感を覚えてしまふ。一誠の気が不意に緩む、と同時に彼の意識はそこで途絶えた。

「なんだこりゃ、痴情のもつれか？」

兵藤一誠を始末し終え、その場を後にしようとしていた天野夕麻 堕天使レイナーレの背後から声が掛かる。咄嗟に振り向いたレイナーレの目に映るのは赤いコートに銀髪の男。背には自身の身長程もある禍々しい大剣を背負っている。異様な風貌と鷹のような眼光は一般人の持つソレとは遠くかけ離れていた。

「あなた、もしかしてずっと見ていたの？」

「そんな悪趣味じゃない。それともそういう男がお好みなのか？」

威圧したつもりのレイナーレだが男 ダンテはどこ吹く風とはかりに軽口を叩く。しかし口調とは打って変わってその顔は凍えるような無表情。そして瞳には燃え盛るような怒りが見て取れる。まるで一貫性の無いチグハグな有り様にレイナーレは歪さを感じ、逆に気圧されそうになる。

しかし、この現場を目撃された以上生きて返す訳にはいかない。危険分子となりうる者は見境なく始末せねばならない。レイナーレはコクリと喉を鳴らした後、己を鼓舞するように叫ぶ。

「まあどちらでもいいわ……死んでちょうだいッ!!」

「そうこなくちなー!」

レイナーレは再び右手に光の槍を顕現させ、ダンテは背のリベリオンの持ち手に手をかける。互いの視線がガチリと噛み合い、まったく同じタイミングで地を蹴り出そうした。がその時、眩い紅い光が辺りを包み込んだ。

「あ?」

「なッ!?!」

両者は足を止め、辺りに漂う光に注意を向ける。拡散していた光はやがて一誠の傍らに集結し、その地面に丸い刻印のような物を浮かび上がらせた。それはグレモリーの転移魔方陣。つまりリアス・グレモリーかその眷属が今ここに転移しようとしている。

「これは……事情が変わったわ、また会いましょうコートのお素敵なお兄さん?」

至高の墮天使が悪魔相手に負けるとは思わないが、ここで手傷を負えば後々に支障を来すのは必定。そう考えてレイナーレは飛び去っていく。それに口ではああ言ったもののレイナーレはダンテの力量を測りかねていた。出来ることなら再会は御免被りたいのが本音だ。

第一、勝負の勝ち負けとはそれぞれの気持ち次第でどうとも取れる。勝敗を決定づけるのは実力の優劣ではなく気分の優劣だ。夕焼けの太陽をバツクに黒い羽が舞い散る光景はきつとあの男に感銘と屈辱を与えるだろう。今回は私の勝ち、そうして無理やり優越感に浸るレイナーレ。慢心からなのか背後に気を遣る素振りすら見せない。故に彼女は背後から迫る凶弾に気づかなかった。

「え？ きゃあッ!?!」

直後、レイナーレの翼を何かが貫いた。それに付随するように吹き荒んだ強風が彼女の背を強く押す。急いで体勢を立てなおそうとするも、自身の翼は腱が切れたかのように言っ事を聞かない。

何が起きたのか理解もできぬまま、レイナーレは迫るアスファルトを見つめることしかできなかつた。

遠方で為す術も無く墜落していく墮天使。それをダンテは満足気に眺めていた。

「一石一鳥ってどこか」

呟くと同時、エボニーを腰のホルスターに収める。逃げ出す女性を前にして追いかけないというのは相手に恥をかかせる事に繋がる。つまり先程の追撃はダンテからの粋な計らいだった。生憎、追いかける役目を担ったのはダンテではなく鉛玉だったのだが。

そして本来ならこの後お迎えに上がるのが紳士としてのセオリーなのかもしれないが、ダンテとしてはあの少年の方が気がかりだった。

そう、あの坊やだ。ふと思い出したダンテは少年の方へと視線を向ける。すると、相変わらず地に伏せたままの少年、しかしその傍らにはいつの間にか紅髪の美女が立っていた。北欧系の顔立ちと欧米の成人女性の平均を大きく逸脱した抜群のスタイル。それに負けじと目を引くストロベリーブロンドはどつやら地毛らしく、彼女の高貴さを一層引き立てている。が、しかしながら見にまよっているのはハイスクールの制服だ。大人びた彼女の雰囲気とは真っ向から相違する服装にダンテは微笑ましい気持ちになる。

ほっこりと微笑むダンテとは対照的にその美女は整った容姿も引っ込む程の眼光でこちらを睨みつけている。この敵意の籠もった眼差しには見覚えがある。これはまた面倒なことなりそうだ。ダンテがそう苦笑うと、美女が問いただした。

「この子はあなたが殺したのかしら？」

疑われているというよりは、そうと断じているような語調。ここまですぐで徹底されると、ダンテの反骨心が刺激される。

「だったらどうするの？」

ダンテの言葉と同時に、紅髪の美女は右の手の平に魔力を籠めてこちらに突き出す。対するダンテもエポニー&アイボリーを構えた。

そして数瞬の間の膠着の後、美女はふっと破顔すると魔力を霧散させた。

「わかってるわ。堕天使の仕業でしょ？」

どつやら今のは彼女なりのジョークらしい。迫真すぎる演技にさすがのダンテも身構えてしまった。一般人からしたら寿命が縮むよ

うな所業だが、むしろダンテは気を良くする。ヤバい女は嫌いじゃないのだ。

「「明察だ。それよりそっちの坊やは気にしなくていいのか？ 墮天使に狙われるくらいには厄介なモノ宿しているみたいだぜ」

「……そのようね、「忠告痛み入るわ」

地に伏せた一誠に目をやり、幾らか逡巡した美女は答えた。この少年から『神器』の脈動を感じ取ったのかもしれない。墮天使が危険因子と認識するほどの『神器』を悪魔である彼女がみすみす見逃すはずもない。次会う時には人間ではなくなっているかもしれないが、それに伴う苦悩も生きていてこそそのものだ。少年には悪いがそれで勘弁してもらおう。

ダンテは少考の後、一応のヒントだけは足元にそっと残し、くるりと踵を返すと公園の出口へと向かっていく。

「それじゃ、俺は帰らせてもらっぜ。「このところ物騒みたいだしな」肩越して視界に映る紅髪の美女は無責任に立ち去るダンテを咎めるような表情をしているが、ダンテは気にもとめない。

もとより悪魔が徘徊しているようなこの町だ。それを知る者からすれば、物騒など失笑を買うかもしれない。

この駒王町は人と悪魔が入り乱れた歪な環境。しかもデビルハンターたるダンテはこの町に腰をすえている。職務怠慢もいいところだが、しかしダンテはこの町の悪魔を狩る気にはなれなかった。この町に生きる悪魔はギブアンドテイクの関係で人間と共存している。人間が欲し、悪魔が与え、人間もまた与える。それはダンテが生きた

世界では成しえなかった人間と悪魔の共存の在り方だ。時折眩しくも感じるそれを、ダンテは嫌いじゃない。

だがあの堕天使は人間との歩み寄りを嘲笑うように否定した。あれは己の都合で弱者を貶めることになんの感慨も抱かない輩だ。共存を、他者を慈しむことを捨てたその姿はダンテが生きた世界の『悪魔』と寸分違わず一致する。

ならば今こそがデビルハンターたる己の本分を十全に果たす機会に違いない。

確固たる決意の表れか、ダンテの歩みは力強い。

その姿を前にして紅髪の美女はダンテを引き止めることができなかった。

その晩、駒王学園の旧校舎の一室に、紅髪の美女　リアス・グレモリーは居た。その部屋では唯一の光源であるロウソクの火だけがゆらゆらと揺れている。温かみのある明かりの中でリアスは今日の出来事を思い返していた。

リアスが呼び出しに応じた時、既に血の海に沈んでいた少年　兵藤一誠は『悪魔の駒』を用いた転生を行ったことで事なきを得た。まさか『兵士』の駒すべてを費やすことになるとは思わなかったが。しかしそれもいい。転生に駒を8個も消費したのだから一誠には強力な『神器』が宿っているのは間違いない。そう考えるとリアスの胸は途端に高揚してくる。あの赤い男は『厄介なもの』と形容していたが、リアスからすれば『当たり前』だ。

が、そこでリアスの高揚は鳴りを潜める。そう、あの赤いコートの男だ。人の身では到底振り回せないような大剣を背負った銀髪の男。

常に余裕を崩さない表情に、人を喰ったような態度。リアスは最初、あの男が一誠を殺したのだと本気で勘違いしていた。しかし足元に転がる墮天使の特徴である黒い羽を目にしたことで、寸前のところで思い止まった。あの男が墮天使である可能性もあったが、リアスそれを瞬時に却下した。身に宿しているであろう膨大な魔力から、光の力を微塵も感じられなかったからだ。3大勢力で当てはめるなら悪魔が一番しっくりくる。リアスはそう考えていた。

しかしリアスが一番に懸念しているのはそこではない。あの男がここ駒王町に住んでいること、それがリアスの頭を悩ませている。

あの男が立ち去った後、その場所には紙片が落ちていたのだ。名刺のような材質のそれには電話番号が記されていた。これは連絡を寄越せということだろうか。リアスには判断が付かなかった。

なので仕方なしに部屋に持ち帰った後ぼんやりとその数字を眺めていると、その数字の中4ケタに既視感を覚え始める。そしてリアスはハッと気付いた。それは正しく駒王町の市内局番だということ。悪魔の管轄地である駒王町は、その特殊性から世帯数の兼ね合いを無視して市内局番を町1つで独占している。つまりあの男は駒王町に在住、もしくは滞在しているのだ。

あんな得体の知れない悪魔が己の預かり知れぬところでこの管轄地に滞在している。それはリアスの頭を悩ませるに十分な事実だった。ミスリードという可能性も多分にあるが悪い予感とは大抵当たるもの。一度予感してしまうとなかなかその焦燥を晴らすことはできない。

その時、頭を抱えるリアスに何者かがティーカップを差し出す。ふと見上げればそこに居るのはリアスの『女王』、姫島朱乃だった。烏の濡羽とも例えられる流麗な黒髪と大和撫子を体現したかのような柔和な笑みを浮かべている。彼女はリアスと共に駒王学園生徒の人気

を二分する『二大お姉様』として言わずと知れた存在でもある。

「どうかなされたんですの、部長？」

きょう一日でやたらと老けこんだように見えるリアスを心配してか、朱乃は声をかけてくる。彼女の気遣いは本当にありがたいのだが、リアスは歯切れの悪い返答しかできない。

「ええ、ちょっとね」

「水くさいですわ。話せば楽になる事だってありますのよ？」

思わず全てをさらけ出したくなるような甘い声音。それに加えて母性すら感じさせるこの包容力だ。これこそが彼女の人気の要因の1つなのだろうとリアスは密かに結論づける。

そんな朱乃の魅力に絆されたのか、リアスはポツリと切り出した。

「ねえ朱乃？」

「はい」

「あなた、町で派手な赤いコートに銀髪で身長190cmくらいの男を見かけ　って、どうしたの朱乃？」

リアスはダメもとで件の男を見かけたことがないか尋ねようとしたのだが……朱乃の様子がおかしい。顔は驚愕に見開かれ、体は感動に打ち震えるようにプルプルと揺れている。そこそこ付き合いが長いリアスでも朱乃のこんな表情を見たことがない。

「この姿を眺めているのもいいがしかし、このままでは埒が明かな

い。リアスは朱乃を正気に戻すためその肩を叩こうとする　　が、逆に物凄い勢いで肩を掴まれる。

「その男性とどこで知り合いましたの!?　まさか町で見かけて手を出したなんて言いませんわよね!?　もしそうならリアスであつても容赦しませんわ!!」

「ええっ!?　ちよっ、朱乃!?　落ち着いて!!　ツメが食い込んでるかあっ!!」

朱乃は普段の優雅さなどかなぐり捨ててリアスをブンブンと揺すった。矢継ぎ早に飛び出す質問にリアスは対応しきれない。比喩でなく悪魔も泣き出す形相の朱乃に、半泣きで懇願するリアス。まるで主従が体をなしていない。

そんな状況が幾分か続いた後、リアスの決死の思いが届いたのか朱乃が正気を取り戻す。こほんとワザとらしい咳をしてから仕切り直した朱乃は、打って変わって澄ました顔を繕った。

「それで、その男性とはどこでお会いになられましたの?」

どうやら朱乃の中ではさっきまでのひどい狼狽ぶりはさっぱり無かったことになっているらしい。リアスは自身の『女王』はこんなにも面の皮が厚い女だったかと己の目を疑う。

しかしここで突っかかってさっきのアレをまたやられたら堪らない。リアスは渋々ながらも答える。

「イツセーに呼び出されたときにたまたま居合わせたのよ。墮天使を追い払ってくれたみたいね。彼、どうやら駒王町に住んでるみたいよ」

「そうですねか……」

リアスの言葉の後、途端に朱乃の表情が綻んだ。実際どうなのか分からないがリアスにはそれが恋する乙女の表情に思えてならない。怪訝に思った彼女は思わず尋ねてしまう。

「あなた、あの赤いコートの子と知り合いなの？」

「いえ、そういう訳では……」

頬に手を当ててイヤイヤと身をひねる朱乃。まるで女子同士での語りの場で意中の男子との交際を疑われたかのような反応だ。いつもは大人びた雰囲気の子だが意外にも年相応な一面を持っているようで、リアスとしても微笑ましい気分になってくる。

しかし今回は相手が相手だ。あんな底意地の悪そうな男に引つかかって人生を棒に振るようでは目も当てられない。朱乃はリアスにとって『女王』である前に親友なのだ。その責務を果たすためリアスは親友へ真っ向から立ち向かう。

「朱乃、目を覚まさない。あの男、絶対に女癖がわるいッ！」

リアスは言葉を言い終えることができなかった。否、般若のような形相をした朱乃がそれをさせなかったのだ。

さっきまでの花も綻ぶような甘い様相はさっぱりと消え失せ、全身で憤怒を顕わにする朱乃。彼女の全身にはまるで瘴気のように魔力が漂っている。

それに気圧されたリアスはピクピクと引きつった笑みを浮かべる

ことしかできない。

朱乃はゆっくりと口を開いた。

「リアス、今なんと言いました？」

「えっ？ ええ、あつその……」

瘴気にあてられてまともに呂律の回らないリアス。先程から膝が盛大に笑っている。もちろんそれは疲労から来るものではなく、目の前の恐怖がもたらしたものだ。

「女癖が悪いと仰っしゃいましたね？」

「……はい」

実際には言い終わる前に目の前の女に遮られたのだが、それを指摘できるほどリアスは肝が据わっていない。ただ頷くことしかできなかった。

「いくらリアスといえどもその発言は看過できませんわ。二度と私の前でそんな事仰っしゃらないでもらえませんか？」

「あの、その……はい、『じめんなや』」

暗に謝罪を要求する朱乃。リアスとしては色々と言いたいことはあったのだが、あまりの剣幕に謝罪せざるを得なかった。『王』の面目は丸潰れだ。しかしメンツと引換に朱乃も気を落ち着かせる。

「そう、ならいいんですわ」

朱乃はリアスの謝罪を聞くやいなや、あっさりと機嫌を良くした。次いでくるりと踵を返すと鼻歌でも歌い出しそうなほど軽々とした足取りで部室を後にする。リアスの目にはその姿が奇しくもあの男と重なるように見えた。

「なんなのよ、もう……本当にツイてないわ……」

斜陽企業の中年管理職さながらの哀愁を放つリアス。

あの男の連絡先は朱乃だけには絶対に渡さない。せめてもの仕返しに、リアスは強く心に誓った。

憧憬と再会

時刻は真夜中。ダンテは人通りも疎らな夜道を気の抜けた表情で歩いていた。

暖色の街灯がうらぶれた街をささやかながらに照らし、冷えた夜風がダンテの頬を撫でるように流れていく。その感触がなんとも心地良く、彼の眠気を誘う。閉じかけた瞼に活をいれるため、あくびを噛み殺しつつグッと目を瞑る。

その最中、ダンテは左肩に違和感を覚えた。ともすれば見落としてしまいそうな程に些細な物だ。怪訝に思ったダンテは瞼を持ち上げた後、左肩へと目をやる。

ダンテの左肩、そこにあるのは一匹のコウモリだった。しかしそのコウモリは一般的に言われるソレよりも一回り大きく、鉤爪や牙などに至っては人ひとり容易に噛みちぎれてしまいそうなほどに発達していた。少なくとも人が住むような場所に分布している類の種類ではない。

そんな猛禽が肩に留まっている。傍から見れば危機的状況にあるのは間違いない。だがダンテはソレを振り払う素振りも見せず、ただじっと見つめる。シールドともとれる状況が幾分か続いた後、先にアクションを起こしたのはコウモリのほうだった。

「……………」

コウモリはついと羽を広げたとおもうと突如、発光した。街灯の弱々しい灯りなど置き去りにしてしまうほどの光量にダンテは目を細める。が、しかしそれもすぐに納まったようである。ダンテは再び目を開けた。

「なるほど、粹な真似するじゃねえか」

するとそのコウモリは依然肩に留まっていた。ただその様相は大きく変わっている。そいつは全身に紫電を纏っているのだ。紫色に発光するコウモリなどガラパゴス諸島にだって生息していないだろう。むしろ生き物の範疇を越えている。

しかしそれはダンテにとって大して珍しい物ではないらしい。その証拠に十年來の友人を相手取るように目を遣って笑っている。やがてコウモリは背伸びするようにダンテの耳元へと近寄り、その口をガバッと開いた。噛み付く訳でもなく片方の羽を耳に寄せる姿はダンテに耳打ちでもしているかのようにも見える。いや、事実そうなのかも知れない。現にダンテは未だバチバチと紫電をスパークさせているコウモリ相手に「ふん」だの「ほう」だのと相槌を打っている。

ジェスチャーとは裏腹に物言わぬコウモリとそれに相づちを打つダンテ。奇妙な光景はその後幾許か続き、やっとひとしきり終えたダンテは満足気な表情で呟いた。

「こいつは朗報だ」

時間は深夜、悪魔の時間。周囲には草木が生い茂り、遠目には廃屋が見える。

そんなまともな人間なら寄りも付かないであろう場所を平然と歩く集団が居た。グレモリー眷属だ。目的は大公からの依頼を果たすため。その依頼内容はぐれ悪魔の討伐、町はずれの廃屋に住み着いたはぐれ悪魔を駆逐せよ、とのことだ。

次第に廃屋へと近づいていくと辺りはさらに不気味さを増し、鼻にこびりつくような臭気が漂ってくる。

「……血の匂い」

『戦車』塔城小猫は呟くと同時に制服の袖でそっと鼻を覆った。その言葉に反応してか、先日新たに眷属入りした兵藤一誠は辺りを見回した。するとこつこつといった経験の浅い彼でも認識出来るほどの殺意と敵意が周囲を充満していることに気付く。堪らず彼は足を竦ませ、傍らの主に不安げな視線を向ける。

一誠の視線の先、リアス・グレモリーは物怖じなど微塵もせず、堂々と腰に手を当てて立っていた。

「イツセー、いい機会だから悪魔としての戦いを経験しなさい」

リアスとしては最初からそのつもりで、あらかじめ決めておいた事項でもあった。

対する一誠は途端に慌てた素振りを見せる。

「え、マジっすか!? お、俺、戦力にならないっすよ!？」

「そうね。それはまだ無理よ」

分かっていたこととはいえ、改めて他人から言われるとつらいモノがあるのか、一誠はガックリと方を落とす。しかしリアスは一誠を無能と誇りたい訳ではなかった。

「でも、悪魔の戦闘を見ることができるわ。今日は私たちの戦闘をよく見ておきなさい。そうね、ついでに下僕の特性を説明してあげるわ」

一誠はつい先日まで悪魔どころか人外や異能の存在すら知らなかった。生死を分ける場面などただの一度きりし居合わせたことがない。そんな彼に戦いを強制させるなど酷というものだ。だから戦闘には参加せずとも、得られるものはある。リアスはそう言いたかった。

直接の戦闘は無いと聞き一誠は目に見えて安堵するも、耳慣れぬ言葉に戸惑ったようだった。

「下僕の特性？ 説明？」

「いい、イツセー？ 下僕となる悪魔にはそれぞれ特性が割り当てられるの」

リアスは手間のかかる弟を慈しむように微笑むと、説明を始めた。その内容は悪魔の過去と現況、そして『悪魔の駒』というシステムについて。どれもこれも一誠にとっては初めて聞く事柄であるため、真剣に講義を賜っている。敵の棲家を前にして悠々と話に耽っているのは自信の現れなのだろうか、『騎士』の木場祐斗や『戦車』の塔城小猫もその話に耳を傾け、時には補足を加えていく。

しかし『女王』姫島朱乃はその輪から外れ、ひたすら己の内に意識を潜らせていた。

彼女の胸中を占めるのはあの赤い男。自分たち親子の窮地を赤子の手を捻るが如く打破した男の事だった。

先日リアスの言葉を聞いた時、朱乃はまさかと思った。赤いコートに銀髪、見上げるような体躯。それだけであの男だと判断するには弱いかもれない。しかしあの時は心が波立ち騒ぐのを抑えられなかった。それほどまでに朱乃は彼との再会を渴望していたのだ。

朱乃は数年前のあの夜目にした光景を今でもはっきりと憶えてい

る。

世界が終わったとしてもあの男だけは余裕を湛えた笑みを絶やさず飄々と荒野を歩いているのではないか、そう思わせたあの背中。朱乃はその背中にどうしようもなく憧れた。そして反面、母の窮地を前にしてただ震えることしかできなかった自分が酷く惨めに思えた。

力がなければ『大切』も『特別』も、果ては己の身すらも守れない。朱乃は幼いながらに世の無常さを思い知らされたのだ。

それから朱乃はひたすら強さを追い求めた。あの男のような、どんな大事も些事とばかりに笑って流せる圧倒的な力を。

そのためならば身に宿る血　墮天使の力を使うことも厭わなかった。居て欲しい時に居てくれなかった父、大層な肩書きを持ちながら妻子ひとつ守れない情けない人。そうやって忌み嫌う父の血すらも彼女は己の糧とした。

そして朱乃は一步でもあの男に近づけるなら、そう思って悪魔にもなった。あの男が属する悪魔という種。その高みに登りつめたなら、きつとあの男と再び見える事ができる。そう自身に言い聞かせて研鑽を積んできた。今もまだ飽く無き力への探求は終わることを知らない。

しかし今、朱乃の目標へと至る道半ばとも言える現在、あの男と見えるチャンスが巡ってきた。その事実は朱乃の胸をこれ以上無く掻き立てる。中途半端な自分を、悪魔でも墮天使でもない自分を、結局中途半端な力しか得られなかった自分をあの男はどう思うだろうか。

内心に深く埋没していた朱乃はそこで思考をやめた。辺りに漂う魔の気配が一層濃くなり始めたからだ。見れば、リアスやその眷属の面々は会話を止めていつの間にか目の前にまで迫っていた廃屋を睨むように見据えていた。まだこういった感覚に鈍い一誠さえもだ。

朱乃は内心で迂闊な自身を叱咤し、周りと同じように警戒を強める。ざっと周りを見回した後にリアスが口を開いた。

「ここが討伐対象の隠れ家ね……行きましょう」

リアスは言葉少なながらに明確な意思を示した。上級悪魔である彼女からすればこの程度、恐怖すら覚えないのかも知れない。リアスを先頭にグレモリー眷属は進み、朱乃も追従する。

廃屋に足を踏み入れた途端、朱乃は顔を顰めた。先程までとは比べようもない位の血の臭気が辺りを充満していたからだ。少なくともこれは人間の血が出せるような臭気ではない。恐らくは悪魔の血だ。しかし人間を襲うはぐれ悪魔の棲家に何故悪魔の血が流れるのか。朱乃は疑問に思っても探索を続けていく。

夜目が利くという悪魔の特徴を活かして注意深く探索していく。するとソレは見つかった。朱乃の前方に赤黒い物体が横たわっている。確認するため歩を進めるとやがてその正体が明らかになっていく。

横たわる物体、血臭の正体、それはやはり悪魔だった。そして目の前のソレは悪魔の中でもとりわけ特異な肉体を持っている。屈強な4本の足と多数の蛇のような尾を持った異形の種だ。普段ならその身を遺憾なく振り回して人間を襲い回っていたのだろうが、ソレは既に事切れていた。上半身には深々と袈裟状の裂傷が走っており、そこから脈々と血を滴らせている。恐らく殺害から時間はそう経っていない。

朱乃の横に並び立っていたリアスは同じようにソレを見遣ると、若干ながらの狼狽を顔に漂わせた。

「これは……討伐対象のはぐれ悪魔バイサーね……でもなんで」

死んでいるのか。そう続けようとした時、

「スクールメイトで仲良く肝試しか？ 気持ちには分かるが感心しないぜ」

この場に似つかわしくない軽薄な口調が廃屋に響いた。それはグレモリー眷属の誰のものにも当てはまらない。

しかし朱乃はこの声に覚えがあった。数年の月日を経ても未だに鼓膜にこびりついている。

万感の想いが溢れそうになる。朱乃は立所に振り向いた。そこに居たのは赤いコートと銀髪の男。朱乃はその姿に覚えがあった。瞼に焼き付いた形姿は自身が求める力の象徴でもあった。

「あ……あぁ……」

朱乃の胸が早鐘を打つように踊る。あの夜と寸分違わぬ立ち姿、悪魔に身を墮とす程にまで焦がれ続けたその姿。それが今、目の前に居る。

朱乃はもう居ても立っても居られなかった。勢い良く地を蹴ると脇目もふらず男の方へと駆け、その胸へ飛び込んだ。

「……おっと」

男は困ったような表情をしながらも、些かスピードが乗りすぎたソレを優しく受け止めてくれた。多くを受け止めてきたであろう胸郭の広い厚い胸はなにより頼もしく、さり気に回された腕は無骨ながら

も心地いい。

朱乃は自身の心が水を吸う海綿の如く豊かに潤っていくのを感じた。肩の力は抜け、体は床の上に溶け落ちそうな程。再会した暁に言おうと考えていた言葉など霞のように消え去り、ただただ涙が頬を伝って流れていく。

そして滲む視界に追憶する。気づけばあの日から一度足りとも涙を流したことが無かった。それはひたすらに力を追い求めていたからか、ただそう在ろうとしていたからかは定かではない。しかし今涙を流していることだけは確かだ。

朱乃は男の胸からほんの少し離れ、ついと顔を上げた。そこには依然、困惑顔。自然と言葉が口走った。

「悪魔は泣かないだなんて……ひどい嘘」

あのと時男は言っていた、悪魔は泣かないと。しかし現に泣いている悪魔がここに居る。ならばあの言葉は大嘘だ。そんな意味を内包した憎まれ口が咄嗟に口を衝いた。再会を彩る冗句としては冴えが足りないかも知れない。しかしこの男がどう返すのか、朱乃はそれが楽しみでもあった。

しばらくは困惑した表情を浮かべていた男だが、その言葉を聞いた途端、朱乃の容貌をまじまじと見つめ始める。すると納得気に頷いた後に懐かしさに浸るような笑みを浮かべて言う。

「まあ……そんな悪魔もアリじゃないか？」

返ってきたのは投げやりにも思える科白。柔軟が過ぎる物の見方に朱乃も思わず笑んでしまう。でもそれだからこそ、きっとこの男は自分の荒んだ種姓すら許容してくれる。そう朱乃は確信した。

突発的に起こった再会劇を前に、グレモリー眷属はただただ困惑した。それは赤いコートの中の男の威容に目を奪われたからだとか、普段の朱乃からは思いも寄らない行動に目を剥いたからだとか理由は様々だ。

しかしこのままという訳にもいかない。積もる話もあるだろうが、死体の転がる廃屋ではきまりも悪い。リアスの判断で、一同はオカルト研究部の部室に場所を移した。

テーブルを挟んで一点あるソファアの片方にダンテがどっかりと座り、隣には朱乃が花も綻ぶほどの笑みを浮かべて座っている。そして対面のソファアにはリアス。その後ろで他の眷属たちが控える。ダンテの側は弛緩しきった空気なのに対し、リアスサイドは差はあれど警戒の色が伺えるのが対照的だ。

テーブルに置かれた紅茶を一飲みしたリアスは、慥然とした表情で切り出した。

「……………で、あなたはあそこで何をしていたの？」

一誠が襲われた公園と、先程の廃屋。リアスがダンテを目撃したのはこの二回。そのどちらも人外が関わっている。この町を取り仕切る彼女としては聞いておかねばならない問題だった。

「おいおい待ってくれ。自己紹介が先、だろ？」

「……………ええ、そうね」

リアスは苛立つ。言ってることは最もなのだが、ここに来ても余裕

を崩さない丹力が気に障るのだ。そのフラストレーションは膝の上で握られた拳に如実に表れている。後ろで控える一誠など戦々恐々とした表情を浮かべている。

しかしここで爆発すればやつと思う壺。そう自身に言い聞かせたリアスは深呼吸を繰り返した。

「……私はリアス・グレモリー。この町の管轄者よ」

堂々と名乗ったリアスは次に背後の眷属たちへ視線を促す。ソレに頷いた眷属たちは各々の名を名乗っていく。

「グレモリー眷属の木場祐斗です」

「……塔城小猫」

「えっと、兵藤一誠です」

それぞれの個性を言葉と表情に乗せてグレモリー眷属は名乗っていくが、一誠の顔を見た途端、ダンテが口を開いた。

「へえ、あの時の坊やじゃねえか。元気か？」

一誠は顔の知らない親戚を相手取るように困惑している。ダンテはリアスをチラと見遣る。

「なんだ、説明してないのか？」

「イッセー、あなたが墮天使に殺された時に居合わせていたのが彼よ。前に説明したでしょ？」

リアスは一誠が入部することになった際に、公園での出来事について

ても説明していた。しかし一誠はここ最近の悪魔稼業に追われてすっかり失念していたようだ。

「あ、そうでした！ ……ええと、その節はお世話になりました」

一誠は経緯は定かではないが、彼が墮天使を追い払う素振りを見せていたとリアスから聞いている。故に礼を言ったのだが、ダンテはさりと受け流す。

「気にすんなよ。行き過ぎた痴話喧嘩だと思って覗きに行っただけだ」

ダンテは普段から褒められることなど滅多にしない。だから礼を言われると未だにこそばゆい気持ちになる。故に適当にはぐらかす事にした。それに『墮天使』というワードが出てから途端に顔が曇り出した一誠を見ると話を広げる気にもならない。

一誠が悪魔になった経緯を知る朱乃は、一誠の心情を汲んだ上で自己紹介を続行する。

「私はグレモリー眷属の『女王』姫島朱乃です。もう『お嬢ちゃん』じゃありませんわ」

「ああ。俺の生来有望って見立ては間違ってたな」

朱乃はグレモリー眷属、ひいては悪魔になったことを強調する。彼女は結局のところダンテと同じ悪魔になれたことが嬉しいのかもしれない。対するダンテもそれを悪くは思っていない。

あの夜ダンテが朱乃に言った『悪魔』とは自分の居た世界の悪魔の事であってこの世界の悪魔ではない。自身の意思で悪魔になったのならダンテは口を挟むつもりは無かった。

「このまま昔話にもつれ込もうといった矢先、リアスがこほんと咳払いをする。

「あなた達の関係も気になるけれどまずは自己紹介が先、でしょ？」

思えばダンテの自己紹介がまだである。リアスの意趣返しにダンテは楽しいな笑みを浮かべた。こついつた冗談を言い合える相手にここ最近出会ってないのだ。

ダンテは居住まいを直す　背もたれに凭れた頭を立たせたただけだが　と口上を述べる。

「俺はダンテ。この町でデビルハンターをやってる」

デビルハンター、文字通り悪魔狩り。グレモリー眷属は眉をひそめる。自分たちを狩ることを生業としていると堂々と宣言しているのだ、心象は当然悪い。有無を言わずダンテに飛びかからないだけまだマシなのかもしれない。

しかしリアスはこのダンテという男が悪魔を狩る、その点に矛盾を覚えた。

「悪魔がデビルハンターを名乗るだなんてとんだお笑いね」

悪魔が悪魔を狩る、それには大きく分けて二つのケースがある。一つははぐれ悪魔狩り。主人のもとを離れて邪智暴虐を尽くすはぐれ悪魔を狩る。もう一つは単なる私怨からくる殺生。しかしデビルハンターなどと銘打っている所から大方前者だろうとリアスは推測するが、斯くしてリアスの予想は当たる。

「それもそつだ。はぐれ悪魔を狩って生計を立ててるつた方が正しいのかもな」

前の世界でダンテが悪魔を狩る理由としては、過去の悔恨が大きなウェイトを占めていた。しかし今は生計を立てる上で悪魔を狩っている。ただ金のためだけに、という訳でもないのは確かだが。

ダンテの言葉でグレモリー眷属は胸をなで下ろした。特に朱乃の安堵のしよは半端ではない。ダンテの後を追って悪魔になった筈が、ダンテに狩られるなど救いようが無いのは確かだ。

これでなぜ廃屋のバイサーが先んじて狩られていたのかは一応は説明がつく。自身の管轄地で無断ではぐれ悪魔を狩っている点についてはひとこと言いたい所だが、リアスはぐっと堪えた。

「それじゃあの公園に居合わせたのもその一環かしら？」

「まあそんなところだな」

悪魔狩りについてはさておき、公園の一件についてリアスは切り込んだ。ダンテの腹積もりがどうであれ、警告だけはして置かなければならない。

「ちなみに墮天使の件については手出し無用よ」

「へえ、自分のお膝元で好き放題やらかしてるってのにか？」

ダンテの言い分も確かに頷ける。事実、あの墮天使は一誠という被害者を生み出した。それ相応の報復を行いたいのはリアスとて同じだが、彼女はこの地の管轄者なのだ。時には理性で以て事を運ぶことが必要とされる。

「たしかに言いたいことはあるけれど、それ以上は外交問題に発展する恐れがあるの。そう簡単に手出しはできないわ。だからあなたも悪魔である以上、余計な事はしないでちょうだい」

リアスは努めて真摯に警告した。

現在三大勢力は表向きには冷戦状態にある。水面下での小競り合いは今も継続しているとはいえ、それらが大战の引き金とならない保証は無い。リアスとしても無用な衝突は避けてこの一件を納めたい。

対するダンテはというと、まるで気に留めた様子がなかった。リアスの言い分は人外同士の都合のために人間は犠牲になれと言っているのと同じだ。つまり今後もあの墮天使によって被害を受ける人間が出るかもしれない。それは彼にとって到底許容できることではなかった。

若かりし頃ならリアスの警告など突っぱねて好き勝手暴れまわったかもしれないが、今のダンテは若くない。片手間で策を弄して最終的に我を通す程度の狡猾さを持ちあわせている。

「ああ分かってる。『監視』するに留めとくれ」

「それは私たちの役目なんだけど……まあいいわ。それとあなたがこの町ではぐれ悪魔を狩っている件、私は了承したつもりは無いから」

ピシヤリと言い放つリアスにダンテは苦笑する。ダンテははぐれ悪魔狩りについては有耶無耶のうちに流せたと思ったのだが、お嬢様のガードは予想以上に固かったようだ。

「こりゃ手厳しい。そこそこのお付き合いをさせてもらおうと思ってたんだが」

「だったら挨拶の1つでも寄越したらどうなの？ あなた、『誠意』っ

「言葉知ってる？」

やはり無断で開業した件についてリアスは相当お冠のようだ。誠意という名の手みやげが無いと許可は降りないらしい。それも生半可な代物じゃ、きつと門前払いだろう。

だがダンテにはリアスのご期待に添えるだけのネタがある。公園での一件の翌日に鹵獲した新鮮なネタが。

『誠意』ならアテはあるぜ。乞うご期待だ」

ダンテは絶対の自信をもって期待を煽る。ダンテの言う『誠意』とは前述の余計な手出しに繋がるのだが、そんな事リアスは知る由もない。

「そう、期待しておくわ。あなたは朱乃のお気に入りみたいだね」

つまり朱乃の顔に免じて『誠意』次第ではこの町でデビルハンター稼業を続けることもやぶさかでは無いと言っただ。言質は取った。ダンテは胡散くさい笑みを尚更深める。

対するリアスはさして期待などしていない様子だが、近日中にその顔は驚愕に見開かれることになる。

兇戯と神技

『エクソシスト悪魔祓い』と呼ばれる存在が居る。

エクソシストと言われてまず頭に浮かぶのは、黒い修道服に身を包み首からロザリオをぶら下げた壮年の男性だろう。広義的にはそれも正解だが三大勢力の一つである『天界』、そこに属するエクソシストはそれとは変わった趣を放っている。

天界のエクソシストは光の洗礼を受けた武装を身に纏い、教会や熾天使の命を受けて悪魔や墮天使、魔獣などを討伐する、いわば教会の尖兵だ。人間でありながらも高い身体能力を持つ彼らは凡そが敬虔な信徒であり、神や教会の御名の下でしか力を振るわない。

しかしどこにでも例外は存在する。彼らエクソシストの中には、私怨や欲求のために虐殺を行う者、果ては信仰が狂信へと変化し、同じ信徒をその手にかける者まで居る。もちろん上位者たる教会がそれを見過ごすはずもない。そういった問題を起こしたエクソシストは例外なく異端審問にかけられた後に追放される。

そうして晴れて教会という檻から放たれた彼らは、世界各地で思うままに力を振う。

教会を離れたエクソシスト。彼らは俗に『はぐれエクソシストはぐれ悪魔祓い』と呼ばれる。

そして色素の無い白髪に白い修道服を来た少年、フリード・ゼルゼン。彼も『はぐれ悪魔祓い』の一人だ。

月のない、墨を流したような夜。閑静な住宅街の一角に位置する一軒家の目の前、そこにフリードは居た。

ツイてない。彼はここ最近、心のなかでそう呟くことが多い。フリードがそう思う10割方の理由は、彼の上司に起因している。

彼の上司である墮天使達の機嫌が、ここ最近すこぶる悪い。そしてそのとばっちりがフリードにも振りかかるのだ。

上司たちの不機嫌の原因は恐らく二つだろうとフリードは予測している。まず一つ目は、神器保有者を排除するために町に出ていった上司の一人、レイナーレが翼を撃ち抜かれて無様に帰還した事。そして二つ目はその翌日に違う上司　ドーナシークが行方不明となつて帰ってこないこと。それらがフリードの上司たちの機嫌を悪くさせている。

当の上司たちは不足の事態に慌てに慌てた。行方不明のドーナシークは未だに見つからず、翼を撃ち抜かれたレイナーレなど、怨嗟を隠そうともせず、に辺りにわめき散らしていた。

そんな経緯で今、彼らの詰所の廃教会にはピリピリとしたムードが漂っている。だがしかし、フリードにとっては他人事だ。自分が被害を被っている訳ではない。一応鼻では笑っておいたが、個人的には特に思う事はない。

だが他人事とはいえ、同じ組織という枠組みの中で起きた事でもある。そのシワ寄せはフリードにも勿論及ぶ。居なくなつた上司の穴を埋めるべく上司達は当然フリードにも仕事を割り振ってくるが、その量たるや半端ではない。晴れぬ鬱憤をそこにぶつけるのはやめるとフリードは言いたくなつた。

そんなこんなで、ここところはフリード自身にも鬱憤が溜まっている。今日はそのリフレッシュと、新人研修も兼ねてこのお宅までやってきたのだ。

「そんなじゃ、クソ悪魔くんと契約しちゃったクズにも劣る人間ちゃんにお仕置きしてあげましょつかあー！」

「ひっ…」

フリードは景気付けに叫んだ。すると彼の視界の隅にブルツと震える物体が映る。

「んあー？」

怪訝に思ったフリードは、その物体の方へズイッと首をとまわす。そこに居たのはここ最近ですっかり見慣れたシスターだった。彼女の名前はアーシア・アルジェント。どうやらアーシアは突然叫びだしたフリードに驚いたらしい。そのせいで今にも腰を抜かしそうだ。あまりに高揚したフリードは彼女の存在をすっかり忘れていた。

アーシア・アルジェント。彼女のビスクドールのような顔立ちとブロンドの髪を垂らした容姿は、まさに聖女と呼ぶに相応しい。しかしどういう訳か、こんな辺境の地に飛ばされたらしい。その辺りの詳しい事情をフリードは知らない。フリードが知っているのはアーシアが『聖母の微笑』という回復系の神器を持っているということだけだ。回復系の神器所有者というのは希少で、どこの勢力も喉から手が出るほどに欲しているありがたい存在だ。だが今日の仕事は一方的な虐殺。彼女を付き添わせる上司のセンスにはフリードも首を傾げる。

しかし決まったことなら仕方ない。なにしろアーシアはこれから何が始まるのかを把握していないのだ。息も凍るような情景を前にして、心優しいシスター様はどんな悲鳴を聞かせてくれるのか。フリードはそれが楽しみでもあった。

仕切り直しに派手にいくか、とフリードは再び高らかに叫ぶ。

「んでんで、アーシアちゃんも初めてのお仕事ですケドー……張り切って行っちゃいませうかぁッ！」

フリードは言葉と同時に玄関を蹴り破った。……のだが、ビクともしない。

それもそのはず、玄関は通常、外側からしたら引き戸になっていて、おまけに頑丈だ。人並み外れた膂力を持つフリードでも、綺麗に蹴り破れるはずがない。

突然のフリードの奇行を怪訝に思ったアーシアが不思議そうな顔で見上げている。これには狂人などと謳われるフリードですら若干の居心地の悪さを感じてしまう。

「……………ザッケンなあ!!」

フリードは懐から出したエクソシスト御用達の武器、光の剣でもってドアを切り裂いた。

ストレス解消のためにやって来たのに、逆にストレスが溜まってしまっただけは本末転倒だ。光の剣を懐にしまったフリードはズカズカと中に踏み込んでいく。傍らのアーシアはフリードに咎めるような目を向けつつも、一步遅れてついていった。

玄関を入ると細い廊下が一本、奥まで続いているのが確認できる。そしてその突き当たりにあるドアからは光が漏れ、楽しげな談笑の音が響いている。恐らくそこがリビングで、ターゲットもそこにいるのだろう。

ターゲットはこの一軒家に一人暮らしをしているとフリードは聞いていた。なのに二人分の声が漏れ聞こえている。フリードは内心で首を傾げるが、それもすぐにやめた。今回のターゲットは悪魔との契約の常習犯。その友人ならば同罪だ。まとめて始末してしまえばいい。そうフリードは結論づけた。

一人殺すも二人殺すも変わらない。殺すことに忌避感を覚えな

フリードは、むしろ殺しを促すような哲学を持っていた。その考え方がフリードを狂人せしめた要因なのかもしれない。

フリードは意気揚々と突き当たりのドアまで歩みを進め、ドアノブに手をかけて開こうとする。

しかし後ろに誰もいない事に気付いた。

「んん？」

先程までアーシアがついてきていたはず。フリードはすぐさま背後を振り返ると、アーシアが玄関でもたついていた。彼女はどうやらブーツを脱ぐの到手間取っているらしかった。他人のお宅に上がりこむのに土足というのは許せないだろう。

律儀なことだ。

フリードは内心で吐き捨てた。教会を追放されてもなお清廉潔白であろうとする精神がフリードには理解できなかった。フリードの素行は教会に所属していたころから清廉潔白とはかけ離れたものだ。故に今もここまで土足で上がりこんできた。

同じ元信徒だというのに、なぜこうまで違いがでるのか。なぜああまでして居るかも分からぬ主の教えに殉ずることができるのか、フリードは不思議で仕方がない。

「けっ、くだらねえ」

吐き捨てるように言ったフリードは、アーシアを待たずにドアノブを回す。そして無駄な思考を振り切るように勢い良く押し開けた。

ドアが開ききり、フリードの視界に入ったのは、ソファアに座る中年男性。そして対面に座った赤いコートの男だった。

二人は酒を片手に談笑中だったようで、中年男性の方はグラスを

持ったままポカんとフリードを見上げている。見知らぬ人間が自宅に上がりこんできたのだ、困惑するのも当然と言える。

しかし対面の赤いコートの男は違っていた。彼はフリードがドアを開けても表情を崩さず、むしろ歓迎するかのような微笑を浮かべている。

「なんだ？ おっさん子持ちだったのかよ。ならこんな夜遅くまで遊ばせちゃいけないぜ。最近物騒だからな」

赤いコートの男は中年男性に向かって見当違いな話をし始めた。対する中年男性は呆けた顔のまま横に首を振っている。当たり前だ。いかにも東洋の顔つきをしたこの中年男性から、フリードのような顔立ちの子供が生まれるはずがない。赤いコートの男もそれは承知の上だったのか、二の句を告げる。

「じゃあ物盗りってどこか。こりゃますます物騒になってきた」

その予想はあながち外れでもない。しかし赤いコートの男はフリードを物盗りだと推測したというのに、まるで慌てた素振りを見せない。それどころか更に酒を煽る余裕すら見せつけている。

その態度はフリードをこの上なく苛立たせた。このままでは気が済まない。せめて怯えきった表情を浮かばせてから全身メツタ切りにしてやらないと、この気は晴れない。

フリードは懐から光の剣を取り出す。この光の剣は悪魔にとって致命傷になりうる武器だ。フリードはこの男の微笑も渋面に様変わりするだろうと思ったのだが、

「OK... This maybe funny」

などと言った。フリードは心の奥底からぶつぶつと苛立たしさが

全身に広がるのを感じた。

今まで彼の手にかけられた人間、悪魔は皆一様に泣き叫んで許しを乞うてきた。しかし、この男は剣を取り出したフリードを、オモチャを買い与えられた子供の如く扱っている。もはや屈辱の一言では表せないほどの怒りがフリードの内沸き起こった。

つまり、もうフリードは限界だった。

「余裕ぶっこきやがって、このクソ悪魔があッ!!」

近頃の若者はキレやすい。ダンテはそう聞いたことがある。ダンテ自身も若かりし頃はそういった傾向があった。だから近頃の若者に共感を覚える点多々ある。

しかし、この白髪神父は度を越している。まさかいきなり切りかかってくるとはダンテも思いもしなかった。お陰でこちらは丸腰だし、先程まで陽気に酒を酌み交わしていた中年の爺さんも泡を吹いて気絶している。そういえば彼は小心者を自称していたとダンテは思い出す。

「仕方ねえな……」

ダンテは立ち上がると同時に呟き、両腕に魔力を込めた。白髪神父が振り下ろす光の剣を、構えた腕で受け止める。

「んなあッ!?!」

ダンテの腕をバターのように切断する筈だった光の剣は、金属を叩き合わせたような音をあげて後方へ弾き返された。全身全霊の一閃

を見事に防がれた白髪神父は、目を疑うような視線をダンテに浴びせた。しかしダンテは武器など手にしていない。ただこの両腕でもって剣を弾き返したただけだ。

「Hey・What・s・upp?」

「……な、な……な」

「ん?」

「ナメてんじゃねエぞ!! 悪魔の分際だよオツ!!」

ダンテとしては労りの意味で言葉を掛けてやったのだが、白髪神父は挑発と受け取ったらしい。こういった行き違いはダンテも何千回と経験してきたので、弁解もしない。

白髪神父は叫びながら幾度も剣を振るってくるが、ダンテのガードで全てが無に帰る。如何なる攻撃もダンテが腕をかざすことで、反射されるように跳ね返されていく。

白髪神父は我を失ったかのように光の剣を振り回し、消耗と同時に剣筋も鈍っていく。

「パライ！ パライ！ パライ！ ってかあ!?!」

狂ったように白髪神父は剣を振り回し続ける。

何度も応酬を続ける内、ついぞダンテは馬鹿らしくなってきた。まるで児童のような剣戟と、セツトで付いてくる絶え間ない罵倒と絶叫にいいかげん辟雍してきたのだ。

ダンテも戦闘中、高揚に身を任せて叫ぶことはあるが、この白髪神父の絶叫は聞くに堪えない。口を閉じたら剣が振れないのではと思わせるほどの多弁さには、ほとほと頭が下がる。しかしそれをダンテ

の目の前でやったのがまずかった。

「そろそろ終わらせるか」

ダンテは呟き、白髪神父が大きく剣を振り上げたのを見計らい、即座に踏み込んだ。

そして腕に魔力を纏わせる。それが生み出す作用は先ほどとは真逆。ダンテが頭の中に描くのは、圧縮ではなく放出のイメージだ。

白髪神父の一閃を紙一重でかわしたダンテは、その腕を白髪神父の腹部に激突させた。白髪神父自身の余勢とダンテの推力が神がかり的なタイミングで合致し、爆発的な破壊力が生み出された。

「うづくあっ!?」

リングの上で紡がれた歴史ですら、類を見ないほどの完璧なカウンターが決まった。

その威力は人の身では到底受けきれるものではなく、白髪神父は為す術なく背後の窓ガラスをぶち破って、外へ投げ出された。

「こりゃ不良少年の躰にしては厳しすぎたな……」

ダンテとしては多分に手加減をしたつもりで、ここまで盛大に吹き飛ばすとは思っていなかった。もしかすると無意識のうちに力んでいたのかもしれない。なにしろダンテは、自分より口数が多い人間が嫌いなことから。

内心で窓を割ったことを家主に謝罪しつつ、ダンテは窓の外を眺める。依然、月のない夜は明ける兆候を見せない。吹き飛ばされた白髪神父を見つけるのは骨が折れそうだ。

その時、憂鬱な気分を外を眺めるダンテの背後で何かが動いた。

「ん？」

もしや家主の爺さんが起きたのか。ダンテは振り返る。

「え？」

しかしそこに居たのは金髪碧眼にシスター服を纏った少女だった。年の頃はおよそ15、6といったところで、年齢的には先の白髪神父とそう変わらないように見える。

意外な来客だが、シスター服という点で、ダンテは眉をひそめる。同じ年の頃でシスターと神父だ。恐らくはあの白髪神父の仲間なのかもしれない。すっかり罵倒や絶叫が食傷気味となったダンテは、それだけの理由で目の前のシスターの口を塞ぎたくなる。

だがいくらダンテでも、いかにも純真そうなシスター相手に危害を加えるのは躊躇する。どうしたものかとダンテが悩んでいる内に、シスターが口を開いた。

「あの、つかぬことをお聞きいたしますが、あなたがここのお宅の家主さんですか？」

シスターは困惑顔で尋ねてきた。もしかしたらダンテを物盗りかなにかと勘違いしているのかもしれない。つい先刻、自分が放った冗談がそのまま返ってきたようで、ダンテはなんとも言えない表情になる。

「いや、違うぜ？ 家主はそのソファァーで気失ってるオッサンだ」

ダンテは依然、気を失ったままのそれを指差した。つられて家主の

中年男性の方に目を遣るシスター。

すると先程とは一転して険しい表情を作る。やがて咎めるようなその目はダンテに向けられた。どうやら少女の中でのダンテ像が、物盗りから強盗にクラスアップしたようだ。それは正しくは白髪神父の方なのだが、証明しようがない。外で転がってるであろう白髪神父を差し出したところで、余計に話が拗れるのは明白だ。

「またもやダンテは、どうしたものと悩み始める。が、それは意外な横槍でもって打開されることとなる。」

「こんばんわー、グレモリー眷属の者なん　　ってアーシア!?　　……
と、ダンテさん?」

脳天気な挨拶と共に、兵藤一誠が現れた。

一誠の到来はダンテにとって意外だったが、同時に幸いでもあった。彼の存在は双方の誤解を解くきっかけとなった。

金髪シスターの名はアーシア・アルジェントと言っらしい。最近この町に赴任してきたシスターらしく、右も左も分からない所をイッセーに助けられたようだ。そして今日は赴任して初めての仕事という事で、「ここを訪れたらしい。仕事の内容は教えてもらわなかったようだが。」

そしてグレモリー眷属である一誠は悪魔稼業のためにこの家を訪れたという訳らしい。まさかのバッティングに一誠も驚きを隠しきれない。

悪魔とシスターが懇意にするというのもおかしい話だが、こんな心優しい少女があんな慈愛の欠片もない神父に付き従っているのも

おかしな話だとダンテは思った。しかしこれはダンテが独自の『網』で得た情報と合致する。

ダンテが自身の成果を嘔みしめていると、イツセーが声を掛けてくる

「で、ダンテさんはなんでここに来たんですか？」

今まで一方的に一誠とアーシアの経緯を聞いているだけだったダンテにもようやくお鉢が回ってきてきたのだ。

ダンテは得意げな顔で手のひらを上に向けて語りだした。一誠は「アメリカの人がよくやる奴だ！」と余計な感激をする。

「そこのおっさんとは昼間に初めて出会ってな。意気投合してこの家で酒飲んでたってわけだ。そうしたら、白髪の神父サマが突然上がりこんできたんだよ。ありがたい説法でも聞かせてくれるのかと期待したんだがな……逆上して斬りかかってきたんだよ。それで止む無く撃退したってわけだ。今頃表でのびてるんじゃないか？」

ダンテは事実のみを滔々と告げた。だがそうなるに至った背景については触れることはなかった。

恒常的に人を疑う癖のある者なら、出来過ぎた偶然に違和感や不信を抱くのだろうが、ダンテの前に居る二人はそうではなかった。

一誠はダンテの話を疑うこともせず納得気な表情を、一方のアーシアは話を飲み込んだ上で憂いを帯びた表情を浮かべている。

「そうですか……フリード神父がそんなことを……」

消沈した様子でアーシアは呟いた。その様子からアーシアがあの神父をどう見ていたのか覗えなくもない。

しかし、フリード。その名前がダンテの心の縁に引っかかっていた。はぐれ悪魔狩り稼業をしている中で、ダンテは数回その名前を耳にしたことがある。

粗野で粗暴でイカれたはぐれエクソシスト、フリード・ゼルゼン。近年はダンテの活躍で霞みがちだが、腕事態はその界限で有名だ。銃と剣を併用したスタイルや言動が非常にダンテと似通っているとも言われており、ダンテ同様『イカしてる』と表現されることもしばしばだ。

しかし会ってみれば拍子抜け。最大の売りらしい剣の腕はまるで兇戯のようで、あらゆる武器を扱う狡猾さも余裕も無い。自身に並んで例えられることもある人間の實力は、フタを開けてみればその程度だった。

ダンテはこの事実によって、自分が周りにどの程度に見積もられているのか窺い知る。

「ハア……」

實力を誇示して悦に浸る趣味は無いが、毛程も評価されていないというのも中々堪える。知らず知らずのうちにダンテはため息を吐いてしまった。

物憂げな表情をしたアーシアに、酷く陰々とした様子のダンテ。故知らぬ二人の気落ちぶりを前に、一誠はただただ困惑する。

が、沈んだ場の雰囲気をもよおし、床へ赤い魔方陣が浮かび上がった。

「うお!!? ……あれ、これって?」

一番最初にそれに気づいたのは一誠だった。続いてダンテとアーシアも魔方陣に眼を向けた。

それはあの公園で見たものとまったく同じ　つまりグレモリーの転移用魔方陣だった。紅く煌く魔方陣の上にはいつのまにか数人の人影が鎮座している。

「イツセー君！　助けに　ってあれ？」

魔法陣の上に勢揃いしたグレモリー眷属の一人、木場祐斗が素っ頓狂な声を上げた。はぐれエクソシストの到来を察知して駆けつけたようだが、生憎ダンテの方が何歩も早かった。

「よう、最近よく会うな」

先程とは違って変わった表情のダンテは、待っていましたと言わんばかりの顔を浮かべる。

グレモリー眷属は皆、呆気に取られた様相をしている。唯一、頭痛を堪えるように額を抑えたリアスだけが反応した。

「またあなたなのね……どうしてこんなところに居るか説明してもらえるかしら？」

リアスは不機嫌さを隠そうともしない。

開口一番で質疑に移るあたりは、土地の管理者の鑑とも言えるだろうが、ダンテに答える気などなかった。同じ話をするのは骨が折れる上に、先のようなごまかしがリアスに通用する気もしない。

そして何より、そんな悠長な時間が無いことを、ダンテは察知していた。

「そうしてやりたいのは山々だが……そんな暇無いんじゃないか？」

ダンテはチラリと朱乃に目を遣った。その視線を受け取った朱乃はニコリと笑って頷き、リアスに向き直る。

「部長、」の家に接近する気配がうつほどあります。恐らくは墮天使かと思われます。しかし力量は大したものではありませんわ。ご命令とあらば殲滅も視野に入れ」

「分かったわ。撤退よ、今すぐに」

朱乃はダンテの意思を正しく汲み取り、報告と共に物騒な作戦を提唱し始めた。事を荒立てたくないリアスは冷や汗を流しながら早急に撤退の意思を示す。朱乃は不服そうな表情をするもそれに追従した。

「イッセーも無事なようだし、本拠地に帰還するわ。朱乃、ジャンプの用意を」

「はい」

やはり、リアス達の目的は一誠の救出だった。事態が大きくなることを懸念した彼女は、このまま部室に逃げ帰る算段のようだ。

リアスに促された朱乃は、魔法陣に向きあって呪文を唱え始める。

そこでふいに一誠がアーシアに視線を向け、次いでリアスに正対した。

「部長！ あの子も一緒に！」

一誠はアーシアも連れ帰るよう懇願する。

ただの知り合いに過ぎない間柄とはいえ、見知った相手 しかも、こんないたいけな少女を墮天使の前に晒して置いておくことが許せないのだろう。

「無理よ。この魔方陣で移動できるのは悪魔、それも私の眷属だけ。残念だけどそれ以外はジャンプできないわ」

しかし現実是非情だった。いくら深い情愛を持つグレモリーでも、眷属という困いの外に居る者にまで手を差し伸べることはできない。

一誠は、空気が抜けたように膝から崩れ落ちる。その一誠の視線の先のアーシアは、儂げな笑顔を浮かべた。

「イツセーさん。また、また会いましょう」

何も、今生の別れというわけではない。生きてさえいれば救いがある、再会のチャンスも訪れる。アーシアらしい考え方だった。

その意思を受け取った一誠は、不安気ながらも頷いた。

アーシアの言葉の後、朱乃の詠唱が終わり、床の魔方陣が再び紅く光りだす。

本格的な転移の直前、周りの景色が霞み始めた時、一誠の耳が何かを捉えた。

「嬢ちゃんと坊主の願いは、俺がツケで叶えてやるよ」

それはあの公園で、今際に聞いた声音とピタリと一致した。

あの声の持ち主になら任せていい。

なんの根拠もなく、一誠はそう感じた。波風立っていた不安と絶望は、いつの間にか消え去っていった。

結局、グレモリー眷属はダンテが取り残される事に誰ひとりとして言及しないまま転移していった。朱乃だけが申し訳無さそうな表情

をしていたのが逆に痛々しくもあつたが。

しかし愚痴を立てる時間的猶予もない。

ダンテはアーシアに向き直る。アーシアは一誠との別れ際に、ダンテが放った言葉を飲み込めていないのか、困惑した表情でこちらを見上げている。

「嬢ちゃんは家出とかしたことがあるか？」

「え？ いえ、ありませんけど……」

突拍子もなく出てきた単語に、更にアーシアはわたわたと戸惑った。

だがダンテは構わず続ける。

「そりゃ問題だ。普通、嬢ちゃんくらいの年の少年少女だったら一度は経験してるモンだぜ？」

「そう……なのでしょうが……」

今のご時世、家出の経験がある若者のほうが少数派だが、ダンテはさも当然のように話す。対するアーシアは疑う素振りも見せず、胸中で葛藤しているようだ。

だれよりも『普通』を欲していた彼女は、そういった言葉に弱いのかも知れない。

「だから……」らで一度、経験してみるのも悪くないんじゃないか？
家出の手伝いなら俺も経験があるしな」

まるで悪人が、その道に真つ当な人間を誘いこむような文句だが、ダンテ自身がそういった甘言の飛び交う世界に身を置いていたもの

だからどうしようもない。

それに家出という表現もあながち間違っではない。

ダンテはこの少女が現在、墮天使の庇護下にある神器使いだと知っている。

周りの期待を一身に背負って努力し、結局は周りに裏切られた『元聖女』、アーシア・アルジェント。その失意の中で唯一声を掛け、一時的とはいえ居場所まで与えてくれた墮天使たちは、彼女にとってこの上ない光明だったのかもしれない。

しかし自分から望まず、ただ与えられただけの居場所にどれほどの価値があるのだろうか、ダンテは疑問に思う。

会いたい相手が居る。そのささやかな願いすら理性の箱に押しとどめて、自らの役割を演じる一生などきつとつまらない。

たからこそダンテは家出という形をとって、しがらみから抜け出すことを薦めたのだ。

自身の欲望に従って、自身の手で掴み取る。それが叶ったときの心の満たされようは、言葉にできないほど素晴らしい。ダンテはそんな野性的とも言える生き方の醍醐味を、アーシアにも感じてもらいたかったのだ。

もしそのための力が無いのなら、殻を破る手段すら奪われているのなら、そこにヒビをいれる程度の手助けくらいはしてやろうとダンテは思っている。

弱者に寄り添う。その精神は、他でもない父から受け継いだ大切な誇りなのだから。

ダンテの思惑をよそに、長くも短い逡巡を終えたアーシアは、顔を上げた。

「家出……してみたいと思います。そしてまた、イツセイさんと会い

たいです」

そう語るアーシアの瞳には、明確な決意が見て取れた。
ダンはその言葉に満足気な表情で頷いた。

朝旦の道化師

翌日、一誠はただぼんやりと公園のベンチに座っていた。

きのう、あの一軒家から部室へのジャンプを終えた後、一誠は間髪無くアーシアの救助をリアスに申し出た。

だが当然ながら結果は否。こちらは悪魔で、相手は墮天使の下僕。相容れない関係だ。彼女を救うことは墮天使を敵に回すことになる。それはすなわち、自身のワガママで取り巻く全てを危険に晒すことでもあった。

アーシアとグレモリー眷属。一誠はその二つを天秤に掛ける。その傾きは現在も激しく上下し、価値の、重さの、大切さの優劣をつけることを許さない。一誠は己の領分を遙かに超えた問題を前に、決断を下すことができないでいた。

だが一誠は、アーシアの安否について特段案じてはいなかった。

一誠は確かにアーシアのことを心配している。比喩でなく夜も眠れない程に。しかし今すぐ町に駆け出して風潰しに捜す必要までは無いとも思っていた。

それはひとえにダンテの言葉が原因だった。

『嬢ちゃんと坊主の願いは、俺がツケで叶えてやるよ』

昨日、グレモリー眷属が部室にジャンプする直前に、ダンテはそんな言葉を残した。

ダンテの言う、アーシアと自分の願い。それは再会なのか、彼女が抑圧から開放されることなのか、一誠には分からない。しかし、そのどちらにせよダンテならアーシアを守りぬいて、再び日の拝める場所まで引つ張り出してくれる。一誠はそんなふうに感じた。

勿論、一誠がダンテと顔を合わせた機会など数えるほどしか無い。他人の命を易々と預けられるほどの信頼関係を構築するには、時間も機会も圧倒的に足りない。それでもあの去り際のダンテの声音は、一誠にこれ以上無い信頼を抱かせた。

人任せと言ってしまうえばそうなのかもしれないが、自分がアーシアを探しに行ってしまうえばダンテに抱く信頼を裏切ってしまう気がした。

アーシアは心配だが、同じくらいダンテを信頼している。一誠は相違するようでそうでもない二つの想いに挟まれる。そんな経験は彼の生涯では初めてのことで、今日に入っても心に整理がつかず、霞がかかったままだ。

そしてそんな心持ちでは学校どころではない。一誠は学校やリアスに連絡もよこさず、ふらふらと家を出てこの公園にたどり着いたのだった。

人もまばらなこの公園は、一誠が思考を深めるのに一役買っていたのだが、

「んっ」

その折、ベンチで俯く一誠の耳が人のざわめきを拾う。

ここにはさっきまで誰も居なかったはず、そう怪訝に思った一誠は顔を上げた。

「え……なんだあれ？」

一誠が顔を上げた先、そこには10人を優に超える人だけがあり、何かを取り囲むようにして集まっていた。

こんな平日の昼間の公園に人が群がるとは珍しい。もしかすると

主婦や子供向けの催しが開かれているのかもしれない。

そういった類、普段は目に入っても寄りも付かないものだが、今日の一誠は趣向が違った。考えても纏まらない思考を一旦払いのけるため、彼は進んでその輪に加わることを決める。

「ちょっと寄ってみるか……」

呟いた一誠は立ち上がり、人だかりの中心に向かって歩き始めた。

「よっと、すみません」

一誠が目にしてから行動に移すまでの数瞬の間にも人が増えていたようで、人垣の半円は一層の厚みを呈していた。掻き分けるのにもそれなりの労を要する。

しかしそれもすぐ終わり、やがてこれだけの人を引き寄せていた原因が明らかになる。

一誠の目に飛び込んできたのは、赤いコートに銀髪の男、そして金髪碧眼のシスターだった。

「ダンテさん……とアーシア!？」

一誠は驚愕の声を上げた。

やはりダンテはアーシアと自分を引き合わせるために動いてくれた。一誠は絶大な歓喜を覚えずにはいられなかった。

今すぐにも駆け寄りたいが、ここは衆人環視の場だ。リアスにアーシアとは関わるなど言われていた事も相まって一誠の足に歯止めがかかる。

しかしそれがきつかけとなり、冷静さを取り戻した一誠は最もな疑問を浮かべる。

「……にしても、なんでこんなに人が？」

一誠は再会を喜ぶのは後に回すことにして、辺りを見回す。

周囲にはダンテとアーシアを取り囲むように人が集まっている。いくら彼らの容姿がテレビでもお目にかかれない程に飛び抜けているからといって、人垣を作るほどの観衆を集める理由にはなるだろうか。

それにさつきからアーシアがこちらに気づかず、ハラハラとした表情でダンテを見守っているのも気になる。

何が彼女の焦燥を駆り立てるのか。その答えはダンテの右手に握られていたソレが原因だった。

おどろおどろしい装飾とは対照的に、健康的な昼の日差しをキラキラと反射するソレ。さつきまでは体の影になって見えなかったが、今はハッキリと確認できる。

それはまさしく先日の廃屋でダンテが担いでいた大剣だった。

「なっ？」

見るだけで寒気が止まらないあの大剣は、どう考えても観賞用とった類のものではない。分厚い刀身と振るだけで鈴鳴りのしそうな鋭さを兼ね備えたあの大剣は、実戦で使うためにあるような代物だ。それを衆人環視の場で見せびらかすとはなんたる酔狂か。いかに一誠でも常識を疑ってしまう。

しかしそれは少なからずその道を知る者の見識に過ぎない。何も知らない町民からしてみれば海外で名の知れた新進気鋭のパフォーマーが気まぐれに来日したような認識なのかもしれない。

見たことは無いが、さぞかし有名な人物なのだろう。観衆たちにそう思わせる程には、ダンテの出で立ちが堂に入ったものだった。

期待を寄せる観衆と、驚愕を通り越し呆れ気味に苦笑する一誠。ダンはそれが目に入っているのか、さらりと微笑した後に行動に出る。

彼は大剣を自身の目の前に放り投げ、宙に浮いたその剣先を蹴り上げた。

大剣は空に勢い良く飛翔し、爪先と軽く擦れた合った地面は深い溝を刻まれ、砂塵を散らす。

『うおお!!』

観衆が沸いた。持ち手ならまだしも剣先を蹴り上げるとは、誰からしても予想外だった。痛がって然るべき所業だが、ダンはその素振りを微塵も見せない。その超人ふりと派手な見た目が相まって、観衆の心を大いに掻き立てた。

皆が一様に空へと打ち上がった大剣を刮目する。それは一誠も例外ではない。さっきまでの些細な疑問など彼方に吹っ飛んで、ダンの突発的なエンターテイメントに引きこまれていた。

そして大剣はクルクルと回転しながら飛翔を続け、やがてその推力が重力にかき消されると、先ほどとは真逆にダンテに向かって落下を始めた。

未だに回転だけは衰えない大剣をあつ男はどう捌くのか、自然と観衆の注目がダンテに集まる。もし仕損じれば大怪我、しかし尻込みして避ければエンターティナーとしては落第。常人ならばそのプレッシャーに冷や汗の一つでも浮かべるだろうが、ダンテは未だに飄々とした笑みを絶やさない。

刻一刻と落下する大剣に、観衆は息を飲む。このままいけば両断間違いない。しかしそれでもダンテは動く素振りを見せない。

やがて大剣は見上げるダンテの頭上数センチにまで迫った。
もっただめだ、間に合わない。観衆がとっさに目を閉じたその時。

パンツと小気味良い音が鳴り響いた。

「へ？」

一誠が間の抜けた声を上げ、恐る恐る目を開ける。

するとそこには頭上で手を合わせたダンテ。合わせられたその手には、大剣　しかもその剣先が挟まれていた。

『うおおおお!!!』

再び観衆が沸いた。中には小銭をダンテの足元に投げ渡す者までいる。

一誠も素直に感動していた。これほどのパフォーマンスを為すためには大剣を蹴り上げる強さ、タイミング、回転の周期、その全てを緻密に　実際はただの勘なのだが　計算し、それを実行する力も兼ね備えていなければならぬ。いくら悪魔になって力が強くなつたといっても真似できないモノがそこにあった。

割れんばかりの拍手がダンテを讃える。このままお開きと言われても文句が無いほどのレスポンスだ。しかしこの程度でダンテが満足するはずがなかった。

観衆がある程度静まり、落ち着きを見せた辺りで、ダンテは次なる行動に出た。

ダンテは頭上で剣を挟んだ手をそのままに、顎を空に向かって突き

出し　名一杯、口を開いた。

「え……いつて、まさか!？」

一誠のみならず、観衆全員が動揺する。その動作から予測するに、ダンテはあの大剣を飲み込もうとしているのだ。

それは大道芸では十八番とも言える芸だが、今、ダンテが為そうとしているそれは事情が違う。普通、剣飲みに使われるのは1×50センチ程度の薄身の刃のない小剣だ。しかしダンテの持つ大剣はそのどちらもおバーし、さらには刃を潰してあるかも怪しい。

それを飲み込めばどうなるか……皆が青ざめるのも無理はなかった。

観衆はダンテを気遣い、必死に制止を促す。しかしダンテは全く意に介さない。

もはや怒号に近い制止の声をよそに、ダンテは剣先を挟んだ両手を口にあてがう。

そしてどう見ても口や食道より幅のあるそれを 鏝まで飲み込んだ。

「……おおおお」

およそ身長ほどはあろうかという刀身が、きっちり鏝までダンテの中に収まり、おまけに何かが貫通したような音が辺り一帯に響いた。

観衆は絶叫をあげる。ある者は気を失い、またある者は香典代わりに札を投げこむ。そして波紋がまた波紋を呼んだのか、公園の外からゾロゾロと野次馬が集まってくる。

町民たちの憩いの場は、僅か数分で狂乱の渦中と化した。

「ほんと、何してくれてるんですか……」

「ああ、悪かったよ」

頭を抱える一誠に対して、ダンテはまったく悪びれた様子を見せずに言った

あの後、いち早く正気を取り戻した一誠の機転によって、一行はさきほどの公園から遠く離れた別の公園に逃げ込んだ。

一誠とアーシアは再会の感動に浸る暇なくダンテの容態を気にしてきたが、なんてことはない。

いくら食道がスッパリ切り裂かれ、背部から剣先が飛び出そうと、ダンテにとってはさしたるケガではない。もとよりダンテの居た世界の悪魔に身体的なダメージなどほとんど意味が無い。生命力の核、原動機とも言える『魂』にまで及ぶ攻撃をしなければ害することはできないのだ。

そんな経緯で異常な回復力を『悪魔だから』の一言で片付けたダンテは、今現在改めて一誠とアーシアと談じている。

「あの、アーシアのこと……本当にありがとうございました」

ここで真剣な面持の一誠が頭を下げた。

ダンテは一誠が立場上、どうすることもできなかったアーシアの救出を請け負った。そこに明確なやりとりがあったわけではなかったが、一誠にとってはありがたいことには違いない。どうしても礼が言いたかったのだ。

「気にするなよ。こっちが勝手にやったただけだ」

ダンテは手をひらひらと振りながら言う。

ダンテが二人に手を貸したのは、ある種の親心のようなものだ。アーシアには傀儡としてではない自分の生き方をして欲しかった。そして愚直なまでに直向な一誠に手を貸してみたくなくなった。それらは依頼されたものではなく、自分が勝手にやったことだ。故に礼を受け取る筋合いはない。そうダンテは考えている。ツケなどと言ったのも、一誠に気負わせないためだった。

言葉の後、ダンテは突然思い出したようにコートの懐を漁る。

「ああ、それと……これもってけ」

ダンテが懐から取り出したのは、クシャクシャになった紙袋だ。それを一誠の胸に押し付ける。

怪訝ながらも一応受け取った一誠は、その中身を確認する。

「え、これって？」

中に入っていたのは大量の紙幣と硬貨だった。紙幣はどれも千円札ばかりだが、総計すれば相当の額になるのは簡単に予想できる。

そんなものを突然受け渡された一誠は困惑する。

「それ使って二人でピザでも食ってこい。文無しでエスコートなんてカッコつかないだろ？」

ピザなどホールで頼んでも釣りが返ってきそうなほどの現金を、外連味なく明け渡したダンテ。一誠は啞然とした表情を浮かべ、中身が見えなかったらしいアーシアは疑問符を顔に貼りつけている。

紙袋に入った紙幣、それはさきほどのパフォーマンスで集めたものだ。

この町に来て間もないアーシアは、街を楽しむに十分な金を持っていなかった。普通ならばダンテが自分の財布から分け与えてやるのが自然だが、彼は宵越しの金は持たないタイプである。突発的に金が入り用になっても対応ができない。そのためアーシアには社会経験と嘯いて、大道芸の真似事をして金をかき集めていたのだ。ダンテにしては斐甲斐しすぎる行いだが、これは彼らの身をこれから交渉の手段として利用する事に対する詫びでもあった。

「そんな!? 受け取れませんか!」

一誠は大慌てで紙袋を突き返す。

彼女と街に繰り出すというのは魅力的だが、アーシアを救ってもらった上に施しまで受けるのは流石に申し訳が立たない。

しかしダンテにとっては元よりそのために集めた金でもある。そのまま突き返されては報われない。

「そうか? それじゃいつか返してくれ。俺は明日になったら忘れてるかもしれないから、ちゃんと覚えとけよ?」

返したければ返せ。そんなニュアンスでダンテは言った。実際、金があつて困る者などそうそう居ない。虚勢の切り売りを嫌うダンテらしい言葉だった。

しかしそんな態度が好感を買ったのか、一誠は大きく頭を下げる。つられて横のアーシアも頭を下げた。

「本当に……何からなにまでありがとうございます!」

一誠は感謝で胸を塞がれたように礼を述べる。ダンテとしてはこ

ここまで感謝されると若干の居心地悪さを覚えてしまう。一誠の素直さは美点と言って間違いないが、ダンテにとっては毒とも言えた。

ダンテは眩しさを遮るようにイッセーとアーシアに背を向ける。そして背中越しに手を振った。

「こっちもワケ有りだ。気にすんな」

ダンテは公園を後にした。

彼が向かう先は、駒王学園。

遙か風上に雷雲を潜ませた青空の下、ダンテは歩を進める。紅の姫君は人を、悪魔を背負うに値する器か、それを確かめるために。